明治二十六年八月十五日發行

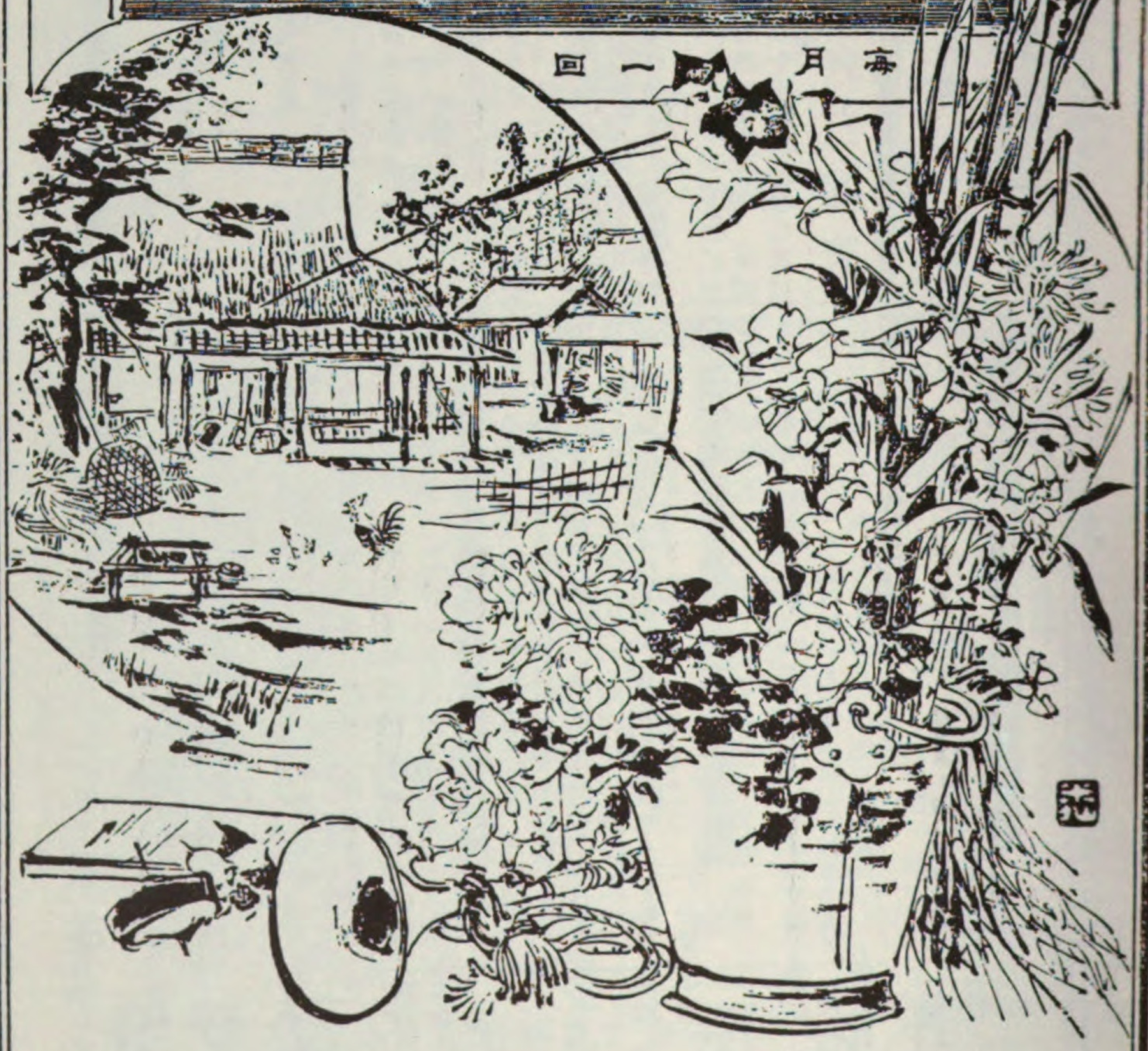
THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

毎月一回



第拾貳號

THE TWELVE MEN OF LETTERS

毎月發兌

拾貳文豪

平田久著

第一巻　カーライル

既に發賣

定價十八錢－郵税四錢　紙數二百廿九頁◎年譜あり◎索引あり◎最も精巧なる肖像手誥あり以て英風を追想するに足る

これ三十九巻の大紀念碑を殘したる著者の傳記也。これ『世界は決して余を知らざるべし』と云ひしトマス、カーライルの傳記也。これ『泣虫トマス』、『懷疑者トマス』の傳記也。これ『時世の謳歌者マコレー』、『時世の明鏡テニソン』と並び稱せられたる『時世の彈劾者』、ベンザムよりダルウヰンに至るまでの思想界の王、永遠不朽なる散文的大詩人、秩序的革命黨、新福音の途を開かんとて野に叫べる豫言者の生涯の歴史也。歴史の廻轉より說き起し、家庭の內事に及び、詳に其の困苦勤勉忍耐勝利の歴史を記して、此の人物が如何なる時代に生存し、如何にして書を著はし、如何なる不朽の事業を殘せしかを論ず。

竹越與三郎著

十二文豪　第二巻　マコレー

本月出版

若し夫れ此の書の價値に至つては自ら定むるの不遜をなさずと雖、材料の撰擇に勉めたる、英國の讀書社會にすら漸く此頃に至つて知られたる事實を包括することは、また斷言するに憚からざる也。

發兌元　東京京橋區日吉町　民友社

平田久著

三版

伊太利建國三傑

定價二十錢
郵稅四錢

十九世紀第一快絕の大舞臺十九世紀第一流の三名優、筆立ち墨走り三雄眼前に舞ふ之を我維新の事歴に考へて無限の感胸底に湧かん。

竹越與三郎著

三版

格朗穵

定價二十錢
郵稅四錢

三百年前大疾飆の如く英國を震蕩したる大英雄、著者一枝の筆に驅られたる一小冊子の中に蟄在す一讀また以て横行深山の當時を思ふ可し。

六版

一語千金

定價五錢
郵稅貳錢

格言は吾人の前途を照らす燈火也

文學博士元良勇次郎著

佛國不換紙幣發行始末并信用論

定價十錢
郵稅二錢

明白火の如く的確石の如し

人見一太郎譯

平民政治

合本二冊
二千九百三十頁
正價四圓
運賃二十錢

本書の超群絶倫なる大著述たるとは世界識者の異口同音に證明する所、堅實、精明、適切、健全なる政治的知識を得んと欲せば此書を措て他に求べきなきも亦識者の異口同音に證明する所也

深井英五譯

英米佛

比較憲法論

定價二十錢
郵稅四錢

○英米佛比較憲法論は萬國憲法中尤も發達せる英米佛三國の憲法の精を抜き粋をあつめ比較酌量して論述したるものにして今後愈善美なる立憲政治を擁立す可き山の如き責任ある我國民の必一讀す可き所也○英米佛比較憲法論は佛國政治大家ブレミー氏の原著にかゝり曾て我憲法制定の時に當り其著書は頗る當局者の參考に供せられたりさの評ある英國の政治學泰斗ダイシー氏の如きは之を激賞し特に夫人に命じて英譯せしめし程なれば價値は不言の中に明らかならん

梶原保人著

政黨論

定價二十錢
郵稅四錢

本書は政黨の發生したるとより其利害得失離合變遷組織及歴史等を評論し進んで政治上及大臣責任上より政黨内閣の自然必然の制度なるを議論したり

德富健次郎纂輯

近世歐米 歴史の片影

定價二十錢
郵稅四錢

大人物と壯景偉觀、天下の至快は此の二者に集まる。而して此二者を一書に集め來つて百尺の錦を織り成すものは、「歴史の片影」也。猛鷲旗下の飛將軍と抵掌して相談し、北米大投機師の肺腑に立ち入り、或は瑞士山中に入つて白髮雪眉の老教育家に交り、或は愛蘭の一新境を訪ふて半生英雄の一生を吊ひ、或は二十餘年の昔に溯つて維廉卑斯馬克毛奇三世奈翁の大立まわりを追懷し、或は巴里伯林の勝遊を試み、忽ち七年前の英國會議場に闖入して近世政界の一偉觀を見、歩を南に轉じては佛國文豪未成名時の物語を聞き、亦遠く世界の末日を推想す。事々壯快珍奇、文字また雄麗淸爽。加ふるに十數個の肖像畫圖を挿む。此珍妙新鮮の獻立を以て江湖諸君の餓へたる讀書眼を饗するものは「歴史の片影」也。

今や炎帝の飛使既に都門に入り、避暑樂讀の時節正に闌なり。快書は快友也。江湖諸君若し「歴史の片影」を携へ去て、樹陰磯邊靜に之を誦くあらは、何ぞ必しも淸風故人の來らざるを憂へん。

排偽哲學論

定價十二錢
郵稅二錢

高橋五郎著

◎日本評論の評　氏が論文の續々國民之友に掲げらるゝや、苟も耳目を近時の問題に注げる者は、皆な之を讀みたり。其議論の精髓に至りては、井上哲次郎氏の誤謬を破碎して猶ほ餘りありたるは公平なる評者の皆な許す所の者なり」然り、井上氏が聖書の曲解も、忠孝の僻論も、氏の論鋒によりて、十分に破碎し盡されたり。吾人は此書を以て江湖に薦む。

◎毎日新聞の評　「筆斧解剖死豚腸」とは此書を評する爲めに咏せられたる一句なり流石の豚も舶來パンにや食傷しけん五臟の内より半消化のレナンの骨もベーコンの皮もべらべら然として出でにけり人若し宗教衝突論の辨駁中最も精確に最も痛快なるものを問はゞ排偽哲學論を以て答へん。

第二之維新

定價十錢
郵稅二錢

人見一太郎著

●朝野新聞の評に曰く、筆路暢達文辭明快論斷亦大に喜ぶべきものあり、

●日本の評に曰く、要するに此書は德富氏の將來之日本の後篇と屑書して尤適當なる者なり、

●國會の評に曰く、此書は人見一太郎氏の著す所、先づ筆を維新革命の事より起して藩閥政府の弊害を痛論し今日を以て第二の維新なりとして國家改革の急務なることを說きたるものにして其の筆力凡ならず而して明治年間に於る政治の沿革を敘する極めて確實なるが故に一部の小近世史として之を讀むも亦可ならん、書中別に米僊翁の畫圖を挿みたるは妙なり、

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治二十六年八月十五日發行
家庭雜誌第拾貳號

目録

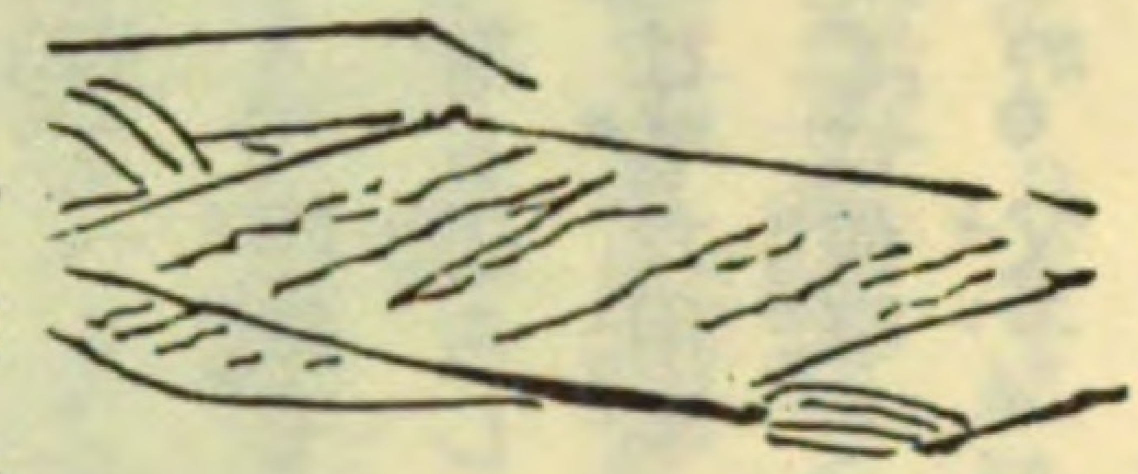


家庭雜誌第拾貳號

（明治二十六年八月十五日發兌）

社説

手紙の事
附、文言と書風



『家書値萬金』とは、世亂れ、父子兄弟四方に散りし時に於て、詩人の涙より湧き出てたる句。

如何に郵便電信の都合は、出て來りたるも、如何に世は太平なるも、如何に鐵道滊車の便あり、往來は自在なるも、家書は矢張り難有きものぞかし。一片の葉書さへも、親み愛するもの丶筆蹟と思へは、何となく床しき心地せらる。

それ程大切なる手紙、千里相距るも、一室に對坐するか如く、十年相見さるも、日夕往來するか如く、彼我の胸に溢る丶誠と情は一片の手紙によりて交通せらる丶に、偏へに此の大切なる手紙さへ、頓斗書かぬ人の多きは何故ぞ。彼等は閑なしと云ふ、此れも一つの申譯なる可し。然れとも閑なきにあらす、筆不精なり。筆不精とは何故ぞ、手紙を書くとか下手なる故に、多くは書きたしと思ひつ丶書かぬなり。諺に長袖善く舞ふとあり、上手なれは、一度の手紙は、自然と氣の向き來りて、二度も三度も書く可し。短かき袖は振られす、下手なる手紙は書かれす。

世には敎育ある人にして、親子の間すら、夫婦の間すら、兄弟の間すら、姉妹の間すら、朋友の間すら、各々天涯地角にあり、互ひに思ひ思はれつ丶あるに、或は三ヶ月、或は一年、或は三年、杳として音信を通せ

ぬものあり。言語同斷、情けなき次第と云ふの外なし。音信疎ければ、情も亦た從て疎し。追々は親しき血緣の間柄さへも、何となく思はず知らず疎遠になり行くなり。手紙を書かぬ罰は覿面に報ひ來れりと云ふ可し。斯る恐ろしき罰あるに手紙を書かぬとは何事ぞ」。

手紙は唯た用事の爲めにのみ書くものと思ふものあり。用事とは何事ぞ、金の貸借か、物の賣買か、仕事の取り遣りか。父子、夫婦、兄弟、姉妹、朋友何爲ぞ斯る關係にのみよりて繋かるものならんや。知れよ、人は用事にのみよりて生活するものにあらさるを。人と人との間、情を傳へ、誠を輸するは、手紙の重なる目的なり。例せは風清く月白き夜、富士山の妙なる姿は、神女の水晶冠を被りたる如き景色を獨り眺め、異鄉なる親友の事共思ひ出し、余は今斯る風景に對し坐ろに君を想ふと、言ひ寄せたらんには、その友も如何になつかしく思ふ可き。富士山は借用證文にあらす。風清月白は、商賣品にあらす。若し用事かなくは、手紙は書くに及はぬと云は丶、それ迄なり。用事にのみ手紙は書く可きものと思ふ人は、能く此邊の意味合を吟味せよ。苟も誠と情とさへ通すれは、眼の前の事を書きても、言ふに言はれぬ深き意味あるものぞ。



手紙の大切なる事は、前に述へたる如し。之に次て大切なるは、手紙の文言なり。近頃は手紙の文躰も大に亂れ、文言も荒み、一見して非禮野蠻の極と思はるゝもの鮮なからず。例せは我か長上に對して、『一筆申入候』とか、『此段申進候』とか、何となく鹿爪らしき命令的文言を用ひ、トても其の子弟か父兄に向て、愉色婉容にて問安する係

見へす。况んや女子の文言に何となく新聞の論說躰を用ひ、『豈に慷慨に堪ゆ可けんや』とか、『是れ妹等か切齒扼腕する所なり』とか一讀興の醒め果つるものなきにあらす。

試みに女學生抔か、其の朋友互に取り遣りする手紙を見よ。洋語もあれは、漢語もあり、言文一致もあれは、五七調の馬琴風あり、或は『侍りける』の和文風あり。所謂る鵺躰とても名く可き、奇々怪々なるもの滔々皆な是なり。されは彼等か其父母兄姉に與ふる手紙も、その文言何となく荒々敷、不作法に、不躾に、人をして何故に其の教育と釣り合はさるかと訝からしむるものなきにあらす。

近頃は各學校共に、多少その弊風に注意し、やゝ改良する所ありしと雖、未た普ねく行き渡らぬこそ口惜しけれ。

其次に大切なるは書風なり。書は姓名を記するに足るとは、大言人を瞞するのみ。書風の巧拙は、その人の品格に關係する甚た大なり。分けて婦人に於ては、書風は成る可く閑雅優美なるを善しとす。新日本の婦人達か、其の見掛に不似合なる折釘同樣の書をニヂリ廻はし、ハ子散らし、若しくは蚯蚓とか蝸牛とか云ふ可きグッ〳〵したる、骨もなけれは、躰もなき、海月を擣り潰したる如き書風には、聊か閉口せさるを得す。學窓の下にある婦人は勿論、既に嫁して新世帶を持つ婦人達も、毎日一時間位は、少しく手習の稽古をしては如何。鏡に對してすら、一時間位は惜しまぬ人々なれば、心の鏡とも云ふ可き書風に骨を折るは、當然の事にあらずや。

書も上手に出來、文言も上手に出來れば、他人の勸むる迄もなく、何となく筆を把りて氣輕になり、是迄無沙汰したる血緣にも朋友にも見舞狀を遣り度くなり、悲しめば手紙となり、喜へは手紙となり、祝儀にも、

弔事にも、事ある時も、なき時も、折に觸れ、興に乘し、手紙の取り遣りもなし、父子、夫婦、兄弟、姉妹、朋友の間、自から情脈の疏通し、如何に多くの祝福か此の中より生す可きよ。

右は男女に通して論したるとなれとも、別して婦人に重きを措きて、殊に新らしき世帶を持つ婦人に對して論したるものと知る可し。

史談

鐵公ビスマアクの家居　中

鐵公元來田舍漢にて尤も田舍を好めり。少年の昔伯林學校にあり、一日散策の途一挺の鋤を見けれは、吾故郷の田舍の事思ひ出で、涙潸然たりしと云へり。ビスマアク夫人曾て或人に語て曰ひけらく、彼は足下の所謂政治よりも寧ろ一個の蕪菁に注意す」と。鐵公自身亦曰く、余か尤も好む所は、遠く文明を離れて、ヨク膏ひきたる田舍靴穿くにあり」と。ビスマアク一家の食料は物として其莊園より來らさるなく、山林田畠灌漑肥料雞豚飼養の法より釀酒水車等の事に到るまでビスマアク一として熟知せさるはなし。故に鐵公猶政界にありし頃、國會に農業問題など起りて、反對黨連りに公を陷穽に擠さんとするも、返り討に逢はさることは稀なりき。其農業問題の實地に明らかなること知る可き



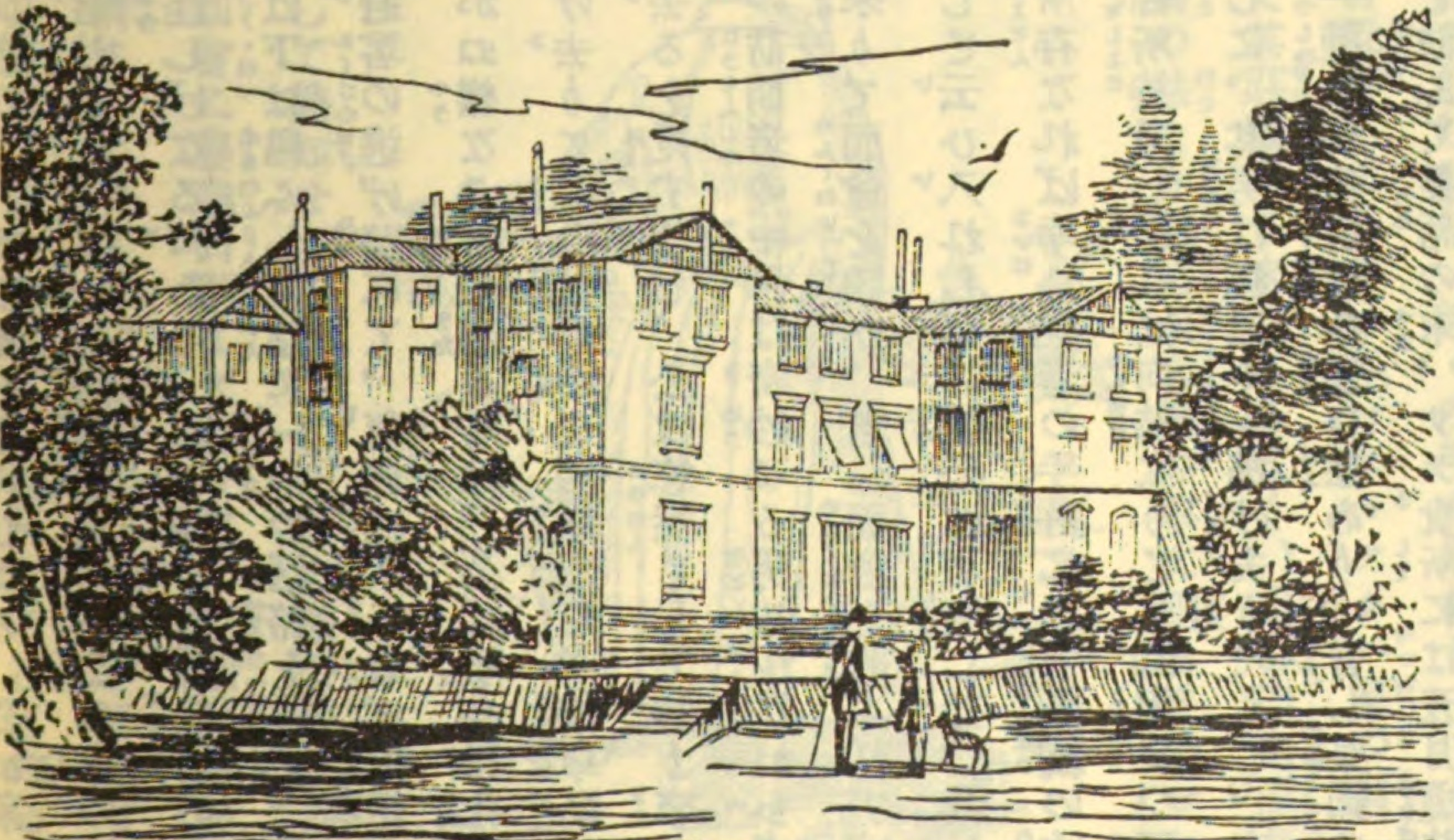
比公隨意の運動

なり。

世間尤も多忙の人はと問はゞ、五六年前迄のビスマァクと答ふるが至當なる可し。夏秋の交公が暫しの閑を偸んで保養の爲めに赴くヴァヅンの別墅にも、一年の間に書簡及小包物の達せること六十五萬通電報一萬通に上れることあり。其手紙にも、或は書留となし、或は親展と記し、或は緊急要件要親展と認め、或時は秘書官宛に「先生御多忙のこと況して閣下の一ト方ならぬ御多忙の事はよく〱存じ居候得共何卒特別を以て此書御一讀被成下度」など記したるものありて、如何にしてか公の一瞥を得むと骨折るさま氣の毒にもまた片腹いたし。斯等の手紙も過半は金乞手紙にて、曾て公の病中斯種の手紙の撿閲係を務めたる某氏戯れに各書に要求しある金額を合算せしに、總計三百萬圓以上に上りしと云ふ。斯る手紙の攻撃は五月蠅と雖も返事をなさゞれば別段面倒の事もなけれど、殊に迷惑なるは五月蠅訪問者なり。此攻撃を逃れむ爲め、公が家には色々の避客法あり。其一は潜逃道なり。公の家の室の一方には怪しげなる戸あり、戸を開けば螺旋階あり、之を下れば下は黒ふして陰に一條の活路を通ず。是れなむ所謂避客の逃げ路にて、氣には入らねど拒絶する譯には行かぬ樣なる客の來る時は、公は潜かに此ぬけ道より逃げ去りて裏の林の中など散歩し、待草臥れて客の歸り去るを見すまし、公は悠然として歸り來るなり。數多の訪問者の中には奇妙なる男も少なからず。曾て或男來りて面會を請ひ、若し面會を許されずば縊れ死す可しと云ひ入れしに、鐵公は小使して、若し愈〱縊死の御所存なれば幸ひ拙者の手許に近頃新綯の丈夫なる繩一條所持致し居れば何時なりとも御用立つ可しと言はせしに、其男は狐鼠々々逃げ去りたりと。亦公の家には一種の長坐客追ひ拂ひ法あり。昔し某國の全權大使公を訪ふて長話の末、サテ貴所には五月蠅訪問

者も無參り候はん其をば如何にしてのがれ玉ふぞと問ひしに、公答ふらく、イヤ其は別段面倒の事にも候はず、客のあまり長坐する時は荊妻直ぐに拙者を呼び立て其れにて應接は相終り候」と。語未だ終らず戸開けて一僕鞠躬如として入り來り、一揖して主人に向ひ、奧様の若し暫らく御外しが出來ますればドウカ一寸御出下さる様にとの御言葉で厶ひました、と言ふ。あまり覿面の證據に全權大使は顏赤うなし、暇乞もそこ〳〵辭し去りしとぞ。

獨逸の故名將モルトケは甚だ骨牌遊を好めり。ビスマアク亦壯年の頃には甚だ骨牌を好めり。然れども英雄の手中に入れば骨牌も政略の種なり。千八百六十五年の夏ビスマアク墺國の使臣ブルームとガスタインの條約を結びし時、一夕骨牌遊をなすに、ビスマアク從つて賭すれば從て敗れ嚢を振ひて猶やまず、衆人皆其の無思慮唐突なるに驚く。然れども是正にビスマアクの計



フレデリスルヒに於けるビスマークの家屋

略にして、墺國の使臣ブルームは骨牌遊ほど人の性格をあらはすものはなしとて之をビスマアクに試みむとなせるを、敏捷なるビスマアク早くも見てとり、策に就て策を施し、幾百テーラルを無暗に擲ちてサテは有名のビスマアクも深沈遠謀ある男にはあらざりけるよと敵に油斷せしめん爲めなりき。

ビスマアク甚だ交際社會を好まず。品行方正にして、未だ曾て此點に批難を受けしことなし。唯一度ビスマアクがカスタインの條約を締結せる後同所に於て伯林オペラの坐頭ルッカア女史、閣下は政界の名士妾は技藝界の名婦イザ諸共に寫眞をとらせ申さん、と言ひければ、ビスマアクも笑つて之を諾し、兩人揃ひて撮影せしめたることあり。寫眞は「人生は本氣なり、技藝は氣輕なり」との句を題せられて、獨逸國中に賣りひろめられ、評判嘖々たりしが、是れ素よりビ公壯年時代一時の戯れのみ。其家庭の關係の清淨和親なる、殆ど言を挿む所なし。老夫人今猶壯健にして、良人と共に住す。其人物、其良人に對する關係、宛としてグラッドストーン夫人の老偉人に於けるが如し。ビスマアク夫人はまことに日耳曼家妻の標本なり。鐵公曾て人に語りて曰く、余をして今日あらしめし者は彼女なり」と。此句殆んど何れの大人も其妻に對して言ふ所の常套語の如くなり居れど、鐵公の夫人は實に此贊辭の幾分を荷ふ可き價あるなり。蓋し或人の言の如く「大人の妻は、質實沈重にして情あり愛あり常情あれば即ち足る、才を以て才に配するは往々にして火を發するの恐れある」なり。

一王國を挫き一帝を擒にし鐵血政略を唱道し名を聞いては泣兒も哭聲をとゞむる夜叉大王ビスマアクも、皮を剝ぎ心に入れば、素是れ有情の人、寧ろ多情の人なるのみ。晩間散步より歸り來りて家族親朋と打くつろぎ、三呎にあまる長煙管の煙靜かに吹ひて、傍に侍す

る牛の如き巨犬の頭を撫でつゝ徐ろに浮世咄をなすビスマアクを見ば、誰か半點の愛を此人に起さゞらん」。英雄多くは犬を愛す。巨眼南洲の犬を愛して、犬を抱ひて寢ね、犬に鰻飯の一半を分ちし話などは今も傳はる所。ビスマアクまた愛犬癖に於てはまさるとも劣らざるなり。十四五年前公の愛犬サルタンの病んで將に死なむとするや、ビスマアクは哀んで其邊を去らず。長子父の裾を拉て室外に去らしめんとせしに、戸口までは來りしが、頓て振りかへりて犬と眼を見合はせ、「否、余を此處に殘し置けよ」と言ひつゝ、終に其犬の死する迄は其塲を去らざりし。犬已に死するの後、ビスマアク傍に立つたる友人を顧みて曰く、我日耳曼の先祖達はやさしき宗教を信じ居たり、彼等は生前忠實の侶伴たりし良犬には死後必らず再たび天の狩場に於て出會す可しと信じたり、余も之れを信じたく思ふ」と。

文藝

兵士の夢

カムベル作　家永ねい子譯

休戰告るラッパの音



四方にひゞきて　暮れはてし
夕空見れば　幾列の
衛星高く　輝きぬ
終日戰ひ　つかれたる
兵士の群は　こゝかしこ
或は眠りに　あるはまた
深手え堪ず　打斃れ
地上に枕　ならべたり
狼怖す　松火の
死兵守る　側に
藁の褥を　打敷て
晝の疲れを　休めけり
眞夜半ちかく　見し夢の
さむる間もなく　またもなほ
三度見にけり　同し夢

いと慘憺き　戰場を
離れて我は　たゞ獨
荒野遙に　徘徊ひきつ
うらゝに晴れし　秋の日の
日影のながく　いつしかと
われは故山に　歸りけり
心も年も　若かりし
むかし愛にし　野遊びを
繰返してぞ　昔時に
己が牧ひにし　山羊の聲
稻苅る人の　歌の聲
なをそのまゝに　きゝにけり
家の族が　うち集ひ
酒酌かはし　我はわが

いとも嬉しき　心情より
慕へる友の　側を
再度去らぬ　ちかひせり
子等はいくたび　キスしつゝ
妻はなみだに　咽びつゝ
とまり給へよ　とまりてよ
疲れはてゝや　御坐すらん
いざ休息ひてよ　我背子と
いひし言葉の　嬉しくて
とまらんものと　兵士の
喜ぶ間さへ　なつの夜の
一夜の夢は　明方の
ラッパの音と　もろ共に
果なく覺て　吾妹子が
聲はかすかに　殘るなり

圖書館の一日

微笑子

夏の日は中々に凌ぎ難きものなり、終日家に在りて机に凭れば、睡氣ざして文字は目に入らず、文字だに目に入らぬほどゆゑ、其意味の頭へ入るべき道理なし、いつしか横に臥して二三時間も眠るとあり、又た眠むからぬ時にも小兒に妨げられ、あるは尋ねくる人に妨げられ、食時には口にものほしからぬ時にても、膳の前に坐らねばならず、斯くてふみ讀む間はまことに少なく、ほと〳〵困じはてたるところへ、親しき人より圖書館へ行きたらばよからんと勸められ、始めてさる書讀むによき所あるを知り、これも聖世の餘澤とよろこび、すぐる日ゆきて見ける、

上野公園なる美術學校の後へまわりもて行きしに、ひだり側に東京圖書館と筆太にしるされたる標はかゝり

居りぬ、門の内へ入りけるに、庭の景色の美しきに見とるゝばかりなり、年いとふりて枝しげく、高くみそらに聳へたる銀杏の樹は、涼しき風を受けていと心地よく、秋くれば霜に染められて、二月の花より美しかるべしと思はるゝ小楓樹は、二もと三もと途そばに枝をつらねて、行儀よく立ちならび、其他柏、栗、松、椎など、ほしいまゝに生ひ茂り、天鵞絨の如き青苔の上を、やゝ冷かなる清き風がおもむろに撫でまはす心地よさ、清き泉のほとばしる傍には、曾て一點の塵だにうけぬ芭蕉の高さ二丈ばかりなるが、すらりと姿形よく立ちたるさま、さながら胸襟の灑然たる隱君子が月に向ひて嘯き居るが如し、

われは此庭の景色を打ち眺めたるのみにて、早や既に胸の中いとすが／＼しくなりたれば、頓て圖書館に入り、書籍借覧券を買ひて、特別の二字をかぶれる閲覽室に入りぬ、此室はいと靜かに六個の大なる机を据へ付けありて、われより先きに來れる人は、五六人ばかりにて、まだ多くの席のひろ／＼と殘りてありければ、われは桐の葉の涼しき風に搖かされつゝある西の方の窓下にて、ほしいまゝに一個の大なる机を占めて、曾て見たしと思ひ居たる書を、制限の許すかぎり借り受けて、飽くまでも貪り讀みける、午後三時頃になりては、多くの書見る人は、大抵つかれはてゝ中にも年若き人は、行儀の宜からぬが多く、椅子にもたれて欠伸をなすと頻りにて、居眠りをなすも間あり、甚しきは人なき隅の方へ行き、三ツばかり椅子を聯ねて、其上にあがりて横に臥するもあり、まことに見にくき限りにぞありける、さていとも／＼感ずべく、人の摸範ともなるべく見へけるは、六十あまりにもありなん、頭に雪を戴きたる老人の少しも疲れたる顏色なきことなり、老ひたる年にてありながら、圖書館に來るほどの人ゆゑ、すこやかにて耐へ忍ぶ根氣のあるとは、言ふ

までもなけれど、なべて昔の人は、行儀正しく身を持ち慣れたるゆゑ、少しの疲れに意氣地もなく脊伸を爲し、あくびを爲して見苦しき振りを人に見することとなし、いとも〳〵敬ふべき事なり、われは今の人が行儀を謹まぬをなげきて、これを記すこととなりけるが、筆をおくに臨みていと耻かしくぞ覺へける。

樂みは

樂みは夕顔棚の下すゞみ、緑りの風そよ〳〵と渡る處に、如何に微妙なる彼女——樂み——の舞は舞はるゝよ。

於戯天の樂師たる彼女！彼女の姿は春の雲の若くに澹如たり。彼女の影は夕やけの空の若くに的爍たり。彼女の肌は羽二重の若く滑かに春裳の若く温柔なり。而して其手を擧げ袂を翻せば異香馥郁として大地に滿ちぬ。

彼女は氣輕にして能く笑ひき、彼女は無邪氣にして能く言ひき。多嬌にして脈々たれども愁を含むとなく、輕妙にして婆娑たれども翅の音の得も聞えず。

天上は彼女が常住の都なり、人間は彼女が屢來て舞ひ遊ぶ所なり。彼女の來り舞ふ所則ち是れ幸福の在る所、彼女が舞へば砂漠も碧りの草生ひ、荊棘も薔薇の花咲くべし。

而して彼女は最も深切にして如何なる茅屋の中にも舞ふなり、たとへ金殿玉樓に舞はぬ事はありとも。

看よ、

玉の如く肥えたる稚子が睡と相倚りて小臥床に横はる時、輕き風に入て彼の傍を看まもりつゝ、其睡より返て圓やかなる小さき黑き眼が自家の單獨を見出さんとするや、彼女は彼を寂しさの外に置くべく彼が枕頭の風車を蹴て廻風の舞をなすにあらずや。轉一轉小さ

き眼は彼女の風車を趁よ。
去ればなり、少女の手にせる人形にも、少男女のまゝ事にも、特には夫妻の間、父子の間にも、弟兄姉妹親族故舊の間にも、彼女の下り立つ所に、彼等は互に親愛の手を握るなり。
美はしき彼女よ、貴き彼女よ、彼女の舞樂に由て僅に砂漠の外に置かるゝ世は、如何に彼女の惠みを感謝すべきぞ。
幾段の霞を剪裁ちて成せる天の羽衣、輕やか打かへし蹴かへして舞ふ面白さ。雲の袖打拂ふ嵐に花降り、廻風雪を驚かし、落日紅の裳裾を曳く。
此の舞樂をみとれて興旺し意滿てる老幼男女の數々、天つ風雲の通路を吹きとぢつゝ夕顏棚の下蔭の團欒、樂哉。樂哉。

家政

障子の硝子を拭ふ心得

美妙

段段硝子障子を多く用ゐるやうに爲つていづれの家でも手段に當惑するのはその硝子を常に奇麗にして置く事である。硝子の拭ひ方ほど面倒で手間のかゝる事はなし、從つて拭へば從つて曇り、はては下女などの大不平の種となる。

今それについて言ふ心得はひとり硝子障子のみでなく、硝子窗にも勿論適用は出來る。幾分か此心得によつて取りあつかひ、譯の分からぬ縞摸樣を滑潔な表面に薄ぎたなく殘すことのなくなるのもまたホオムの快樂の一つといふもの。

極めてよく照りわたる日につひ硝子を拭きたくなる樣子は一般の常らしく見えるもの、これが餘り宜しく無し、一番いゝのは曇つた日、もつともわるいのは霜

のつよい朝と風の烈しい日、これらがあらかじめの心得である。

拭ふには顏などの化粧と同じく、實際微温湯が宜しいもの、兎角世人は何か曰く有りさふで無いものは珍重したがらず、實際は墨汁ぐらゐ掻き攪ぜたやうな水でも何かそれ何とやらいふ藥劑だげなど、大きに信けて、騷ぎたがるのが多數の癖とて、兎角との微温湯、——清淨無垢の湯——といふものが擯斥を加へられる。

他の法を言へばいくらも有り、中で石鹼を用ゐるのは惡し、アンモニヤを些し加へるのも餘り感心せず、硼砂をすこし解かした水は可なり佳し、洗濯曹達も隨分よし、多く米人などは此最後の法をつかふ。あるひは又ケロシーン油、露國の北部、寒氣の最も猛烈な國、即ち湯も氷になる國では奇妙にも活版印刷の墨汁をつかふ。布帛はフラチルが殊に良し、革類は兎角取りあつかひが六かしい。

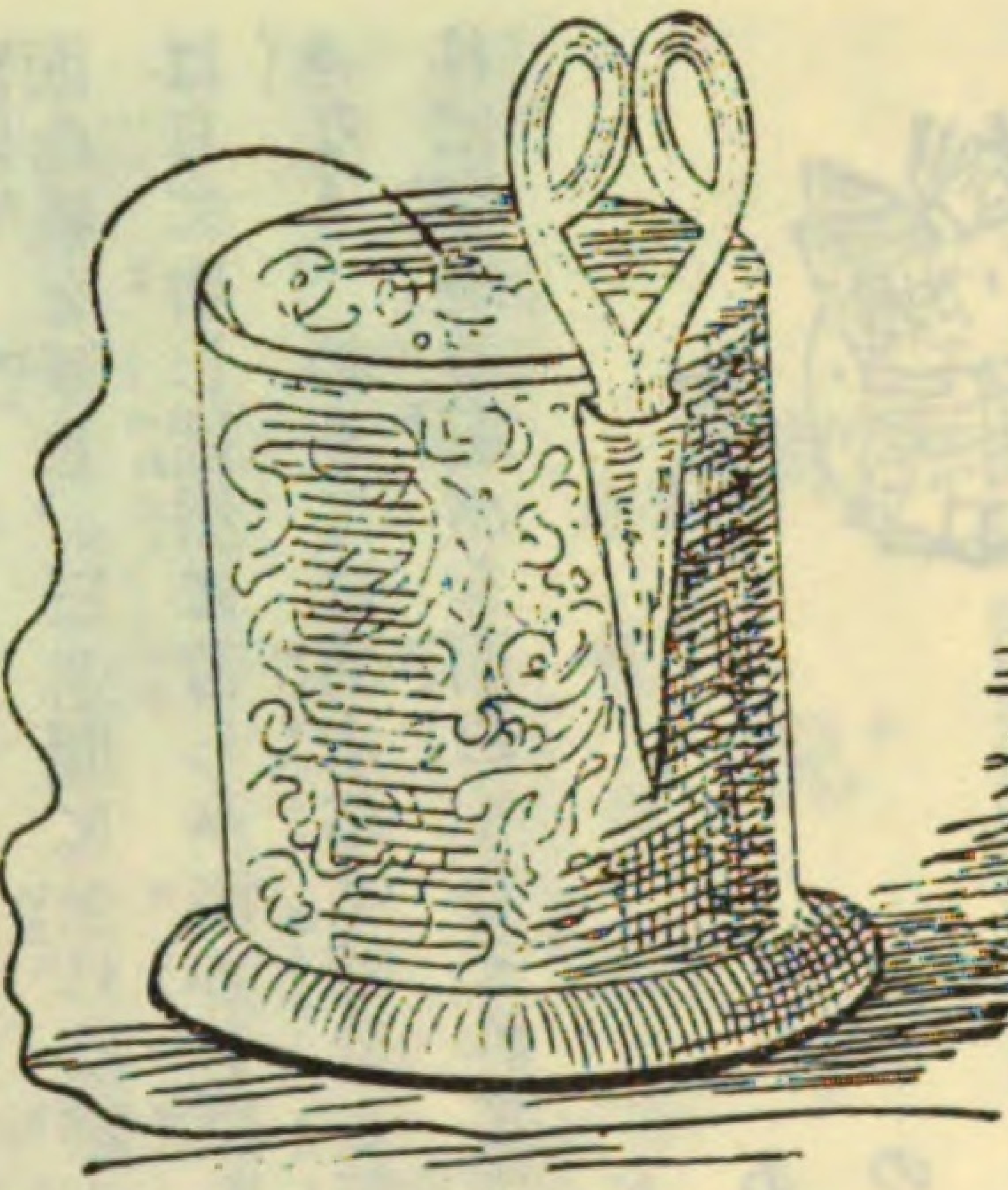
艶消し硝子、及び色附け硝子などはフラチルは相應せず、この時には海綿が一番よく、それに微温湯を付けて拭ふに限る。他の藥品などは一切わるい、兎もすれば硝子の色を見ぐるしく變へて仕舞ふ。

ズボンの洗濯

西洋洗濯を業とするものゝ語りしには、洋服のズボンを洗ふことは極めて易しとなり、其方法は先づ暖かき石鹼水を作り、ズボンを之に浸し、またズボンの最とも汚れたる所に石鹼をぬりつけて洗ふべし。此く洗ふたる後は、冷かなる眞水にて之れを洗ひ、少しも石鹼の殘らざる樣にし、さて之れを取り上げて蔭ぼしとなし、生まがわきとなりたる時は、手拭にて其の下部の方に集まる水氣を拭き取り愈いよ乾きに近づきたる時は、左の股より火のしをかけ、次に右股に及ぶべし。品は損ずることなくして新しきものとなるべし。

麻縄の入物

『お母さん何か麻縄はありませんか。
『多分戸棚の箱の中にありませうよ。
『イヽエ見ましたけれどもありません。
『無ひと云ふ事はない筈だからよく〳〵御らん。
『見ましたけれどもないんですもの。
此かる會話は何れの家にても毎々ある事なり。

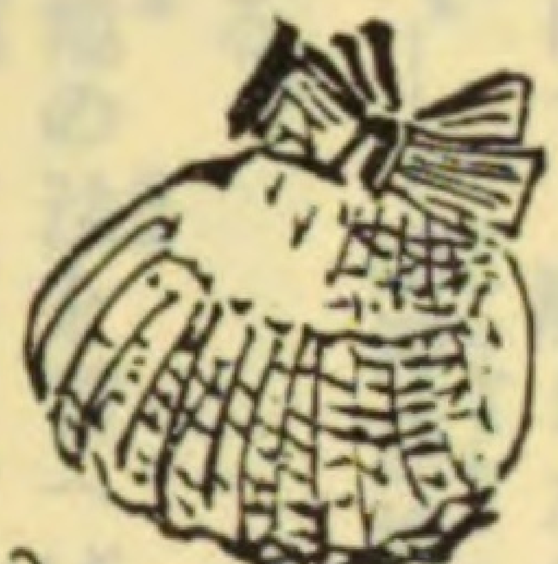


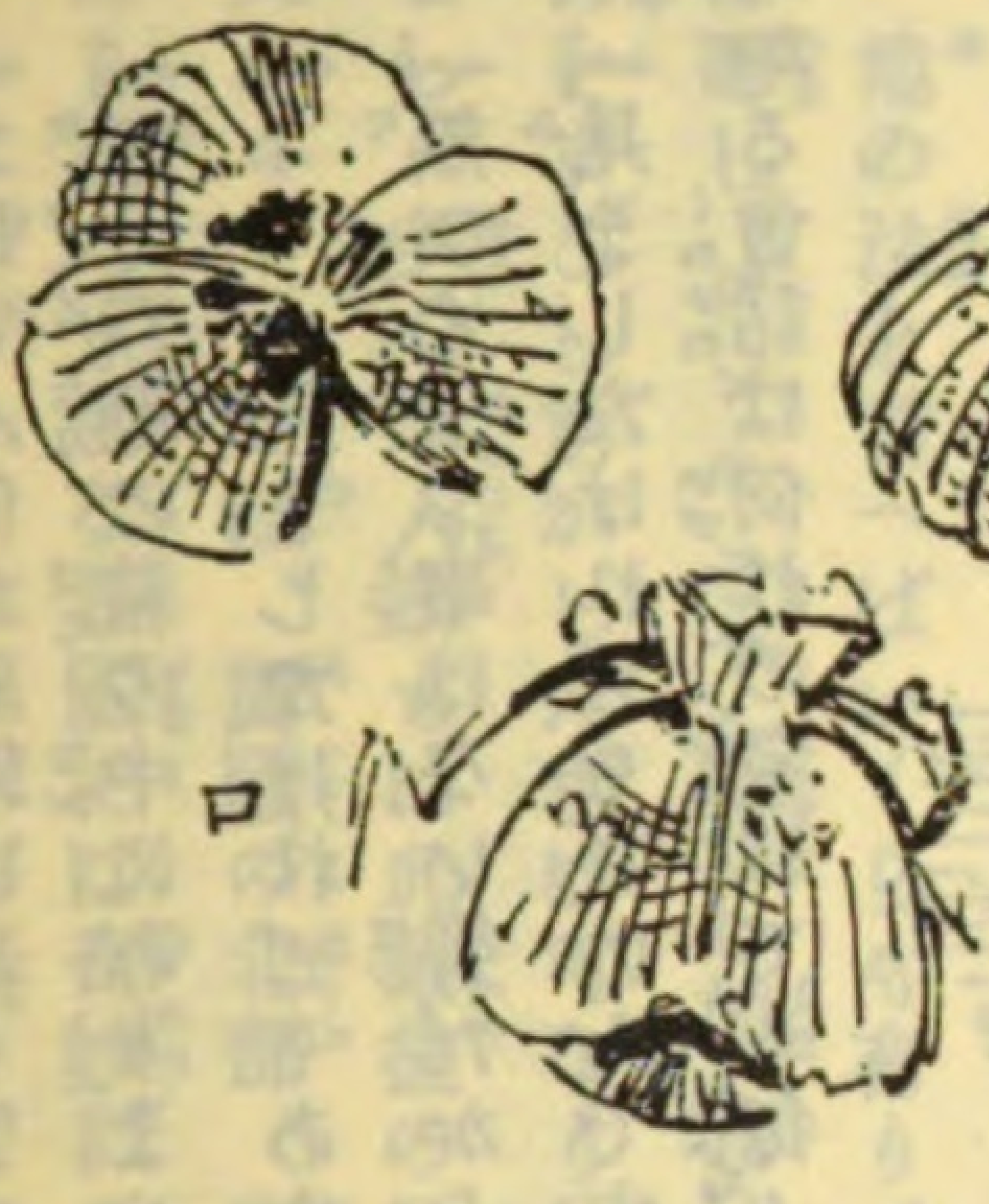
糸、切、麻縄の如きは日々不意に要せらるゝこと多ければ、之を集めて適當の場合には、直ちに出すの要意こそ肝要なれ。上に示めすは、昨今大に米國に流行する品にして、便利なれば、之に摸して同様の具を作りては如何と思はる。革若くは厚紙の美麗なる摸様あるものを以て、短かき茶筒の如きものを作り、其頂上に麻縄の通すべき小穴をあけて、常に縄の一端を是れより出でしむるなり、また其中には鋏を入れをきて、入用の場合には蓋を取りて之を用ゆるなり。其端に見ゆる銀杏がへしの如きものは、壁若しくは柱にかける所にして、若し美麗なる摸様あるものにて作らば、室内の装ともなるべし大小は好のまゝなり。

海水浴を如何にして面白く過さん乎

海水浴は少なくも二三週間以上を浴せざれば功なしと一醫者は云ひけれど、全一の海邊に三四週間を過ですとは中々飽易き業にして、巻きつ開きつ繰り返す波打ち際は足を洗ひ、雲か山かと疑がふべき遠き彼處の水平線より靜々と上る黄金の太陽を眺めて樂しむは先

づ一週日位の間にして、二週間となればもはや少しく面白味を減じ、三週間に至れば歸心を生じ、それよりは日に増し徒然に苦しみ歸心を壓ゆるに苦しむもの往々なり。かくては海水浴も隨分心苦しきものなり。されば海邊の遊びを面白くしそれによりて慰みを得るとを知るは無益の事にあらざるべし。海邊の慰さみは貝細工なり。我が國にても古來種々の貝細工ありて或は貝にて花を作り蝶を作り簪を作り笛を作る等その業一ならざるが、此處に示せるは、第一圖は此の頃米國に流行する針さしなり。これは帆立貝の如き貝を二枚離れさる樣に細きリボン又は美はしき絹切れにてつゞり、貝の糸ゞりの二枚接すべき所を丸きリボンにて開閉の自由になる樣にくゝり。針箱に代用するなり。之は海水浴の土産物としてめつらしく興ある贈りものなり。


才一図



才二図

第二は糸等を入るゝ袋なり。その作り方は先づ（イ）の如く三枚の貝の底をリボンにて一つに繋き（ロ）の如き切の袋を作りてその周圍に又三ツの貝を糊にて張り付け先きに作りし貝を底に付け離れざる樣貝に一二個所の穴をあけ糸にて袋に括り付くるなり。其他第一圖の作り方にて最も大なる貝を以て書畫帖表紙寫眞入等を作るもあれど畧す。

第三は昆虫採集なり海には海の動物あり、山には山の動物ありて各々その性質を異にす。海邊に遊ぶの日海邊の昆虫を集め他日山中に遊ぶの日更らに山中の昆虫を集め來らば只だに慰みとなるのみならず、他日子女教育の助けとなること少なからざるべし。之れを為すの法は種々あれど最も手輕き法方は瓶の如きものにア

ルコールを入れて朝夕散歩の際持參し虫を見ばたゞちに取りてその中に入れ能く死したるを見て引き出だし



圖の如く針にてさし上に幾年何月何日朝或は晝何處にて捕ふと書し置、かくして數十疋に至れは玻璃にてはりたる箱を作りその中に干したる虫を刺しならべて額のかわりとなし、座敷の飾り物となし、子女實物教育の一端となし得へし。

育兒小話

小兒の教育

小兒を教育せんには何歳位より「服從」を教へんかとは數〻問はるゝ事なるが、唯だ初よりと答ふるの外なし。そは小兒は極めて習慣つき易きものなれば、一日我儘を教ゆる以上は、三日之を治せんとするも其甲斐なければなり。去れども此の服從は父母の信實と、



適當の處置に服從するものならざるべからず。適當の處置に服從せしむることをせず、若き父母の變じ易き性質に從て、輕々しく喜び、輕々しく怒り、少しも小兒自身の意を立てしめず、過度の干渉を爲すは、是れ却つて小兒をして父母に抵抗せしむるの基なり。專制家族に不孝の子多きは此道理によりて知るべし。

近時衛生養生の一教育法開けたるより、母たるものが其子女の爲めに心配注意すること一方ならず、然れども世の母の多くは、病人にして少しも己の意志にては何事をも爲し能はざるものに適用すべき方法を以て、氣力盛んなる小兒に應用し、少しも己の思ふが如くせしめず、小兒を以て衛生法教育法の奴隷若しくは犧牲

たらしめんとするものあり。或はまたスペンセル等の教育法をよしとて、少しも服從を敎へずして、放任するあり。何れも皆な間違ふたることなれば、母なるものは少事にても、よく／＼注意して、小兒の意志感情を害せずして、之を誘導することを爲すべし。

小兒夏時の衞生

此の頃病院へ通ふ小兒の中、十中七八は下痢ならざるはなし。下痢の原因は種々あれども、夜中蒲團をぬぎて、寢冷をなすか、未熟なる菓物を食して、不消化を起すか、或は一才前後の小供の牛乳にて養育せらるゝ者は乳の善良ならざるにより、或は哺乳器の掃除の行き届かざるがため、器中の乳の酸化して所謂乳酸なるものとなり、そのために胃を害して、遂に腸胃加多留となるもの等種々あり。凡て小供は肥ゆるも速かなる如く、瘠ることも早きものなれば二日も下痢するときは、肉落ち色衰へて、病人らしくなるべし。勿論一日中に數十度も水瀉するものは忽にすべからざれども、少しの下痢は素人にて醫し得べし。即ち下痢の時尤も注意すべきは、第一食物なり、食物として尤も良きは、牛乳、柔らかき粥、半熟の卵子、葛ねり、等にして、漬物或は青き菓物等の如き不消化のものは、決して食すべからす。

第二は腹部を冷やさゞるに在り、故に下痢中は朝夕十五分以上の腰湯を爲さしめ、腹卷を付けて腹部を溫むべし。特に腹痛のあるときは、溫かになすにより一時痛みを忘るゝとあり。

第三下痢すべきものを出し盡すに在り、過食或は不消化物を食して下痢するに當りては俄かに止むるは反て害あり。されば重炭酸ソーダを服して、下痢する丈け、凡て出し盡くせば、快よくなるべし。かくて止めんと欲するときは、乳飲み子には白米のオモ湯か、少量のアラビヤゴムを湯に解かして、一日三四回も服せしめ、少しく成長したる小供には、アラビヤゴムをサヂ一杯計り湯に解かして服せしむべし。又喉の渴きたるときは、眞水を飮むは下痢を促すの恐あれば稀鹽酸を五六滴位砂糖水に落して飮ましむべし。稀鹽酸は渴を止む

るの功あるなり。下痢の後には往々にして秘結することあるものなれば、その時は藥を用ひずとも、灌腸せば通ずべし。凡て少しの病氣に餘り藥を用ゆるは反て害あれば、大凡のことは節制して醫すべし、尤も好きは病氣とならざる前に注意するにあり。

避暑の小兒

今や天使の如き罪なき天下の小兒は其兩親に伴はれて紅塵萬丈の都下を去り、大磯又は鎌倉又は房州の海濱に行き、白絹の如き顏も汐風に燒けて赤銅色と變し白砂青潮の間を輾轉する樣の如何に勇ましく如何に可憐なるよ。

之に就きて聊か云ふべき事あり、海水浴の人の身體に於ける須要なるは茲に言ふまでもなく、第一に皮膚を强固にし身躰の諸機關を健全ならしむ。昔の人は海水浴と聞きて大事の孫に風邪でも引かしめてはと心配する人あれども、开は殊の外の間違なり。水浴法は海水に限らず冷水にても是非共必要なるものにして、日本人の如きは是迄溫暖の方針を取り外國人に比し衣物も隨分厚衣の習慣を附けしは却て不攝養なり。小兒の時より冷水を以て五躰を拭く習慣をつくれば皮膚も神經も堅固となり、譬へ嚴寒北風に遇ふも感冒等の患なく、皮膚軟弱にして厚衣の主義を取るものより健康の度に於て遙に超絕す。これは小兒に限らず大人にても然り。而して小兒に水浴を爲さしむるには海水を以て最上とすれども寒冷に過きるとならば湯を加えて日向水位にすれば可弱き二三歲の小兒を浴せしめて可なり。四五歲以上なれば海水にて差支へなし。海水に入らば出來得る丈け運動して海水を以て皮膚に刺撃を與ふべし、尙ほ一層刺撃を强くせんとならば海綿又は手拭を以て强く擦りつくべし。泳ぐも好し、漂ふも好し。唯々危險なきやうにして充分身體を動かすが海水浴の急務なり。朝夕二十分間位日に五六回試むべし、長きは惡ろし、帽子を被らず腦を炎天に曝せるも惡ろし。

さて秋冷に遇ひて一家歸京の後は小兒等も學校や其他の事に取紛れ、鐵の如き色せし健全躰の顏貌も再び蒼白となり、折角水浴の習慣も忘るゝ如くになるべけれ

ば、歸宅の後と雖も秋より初冬に至るまで毎日一回宛にても水浴を試み玉へ、これは別に六ケしき事にあらず、盥に冷水を汲み、よく〳〵手拭又は海綿を絞りて身体を摩擦すべし、斯の如くすれば皮膚の氣發を適せしめ、血液の循環を宜くし、其冬には風邪等に冒さるゝこと尠かるべし。但し水浴の温度は小兒に應し知邊の醫者より差圖を受くれば此上なかるべし。

調理談

梅干のジヤム

梅干の時候將に過ぎんとす、之を煮てジヤムとなさば、又美味を食するを得べし。ジヤムの製法は鹽漬にして干し上げたる梅を、一日計り水中にひたし。鹽の拔けたる時引き出し、土鍋に入れ(鐵鍋はあしゝ)水煮をなして、その鹽汁を棄て、更に梅の漬かる迄水を入れ、砂糖を適宜に見計らひて入れて、二三時間煮るときは梅柔かく水少なくなりて、干鹽の如くなるべし。其時火上より下して、水と梅とを別々になし、半日計り、冷たき所に置きて、冷まし、能く冷へたる時、共に瓶の如きものに入れて、固く蓋をなして、冷たき所に置けば、一ケ月位は腐敗の恐れなし。食ぱん、かすていらに付けて食するに、少しく鹽氣ありて夏の辨當等には至極よし。煮る間に時々鍋を左右上下に振りて鍋に焦げつかぬ樣に注意すべし。

米飯のカツレツ(腐敗豫防)

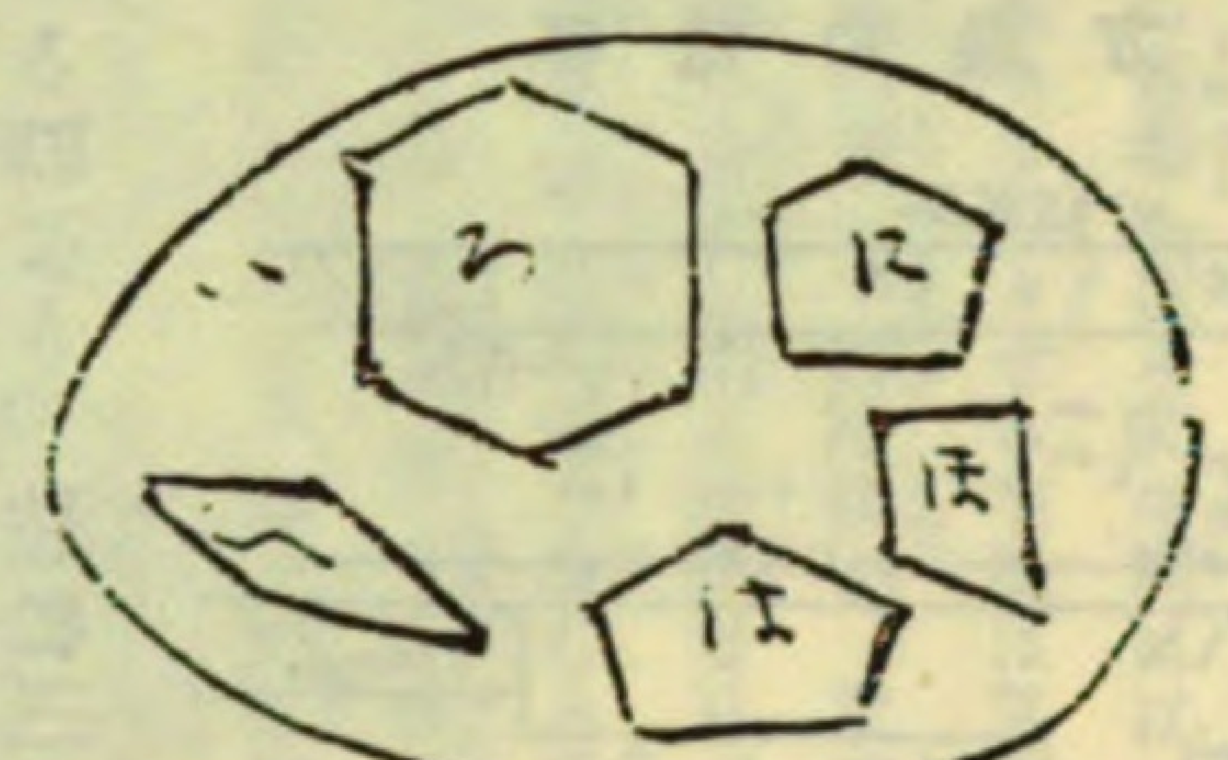
夏は食事の進まぬ時なれば、調理をなす人は、心して食慾の進む樣、種々料理を變へて膳に供すべし。今米飯料理の法を記さんに、炎暑中飯の餘りて腐敗の恐れあるものを取り、少量の鹽を入れ(嗜好に由りて少量の砂糖を入るゝもよし)梅果大に丸め、之に卵の黃味を塗り付け、パン屋にてカツレツの粉とてパンの屑粉を買ひ(カツレツの粉はパンの固くなりたるものを碎けは手製にて出來得べし少しく餘分に求めをかば魚のカツレツ等に用ふるの便あり)丸めたる米飯を轉ろばし、之を牛油か、胡麻油、又は豕の油か望の油にて上

ぐべし。經濟的に之れをなさんには、卵を用ひずして上ぐるも出來得べし。

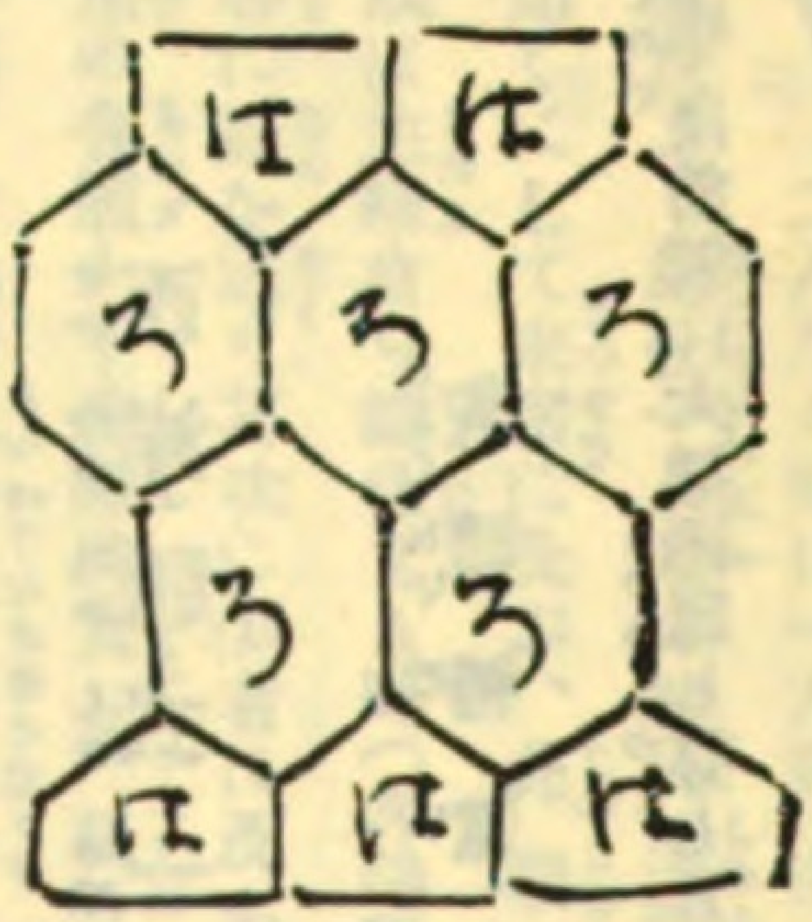
手藝案内

龜甲の巾着

美はしき色々の寄布帛を以て縫合せたる龜甲の巾着は甚だ面白く且つ美麗なるものなり。されど之を製造せんとして原形を過り可惜好き布帛を裁ち損ね無用の費を爲すもの尠からず。左に其標形を圖にて示さん。



(い)は龜の胴(ろ)は龜甲(は)は半龜甲(に)は龜の首(ほ)は足(へ)は尾なり、而して此の標形の通りに合せて呉服紙の如き厚紙に原形を切拔き、普通の龜なれば(ろ)の龜甲を二列に十八個を用ゐ(は)の半龜甲を天地十八個とす。其縫合は左の如し。



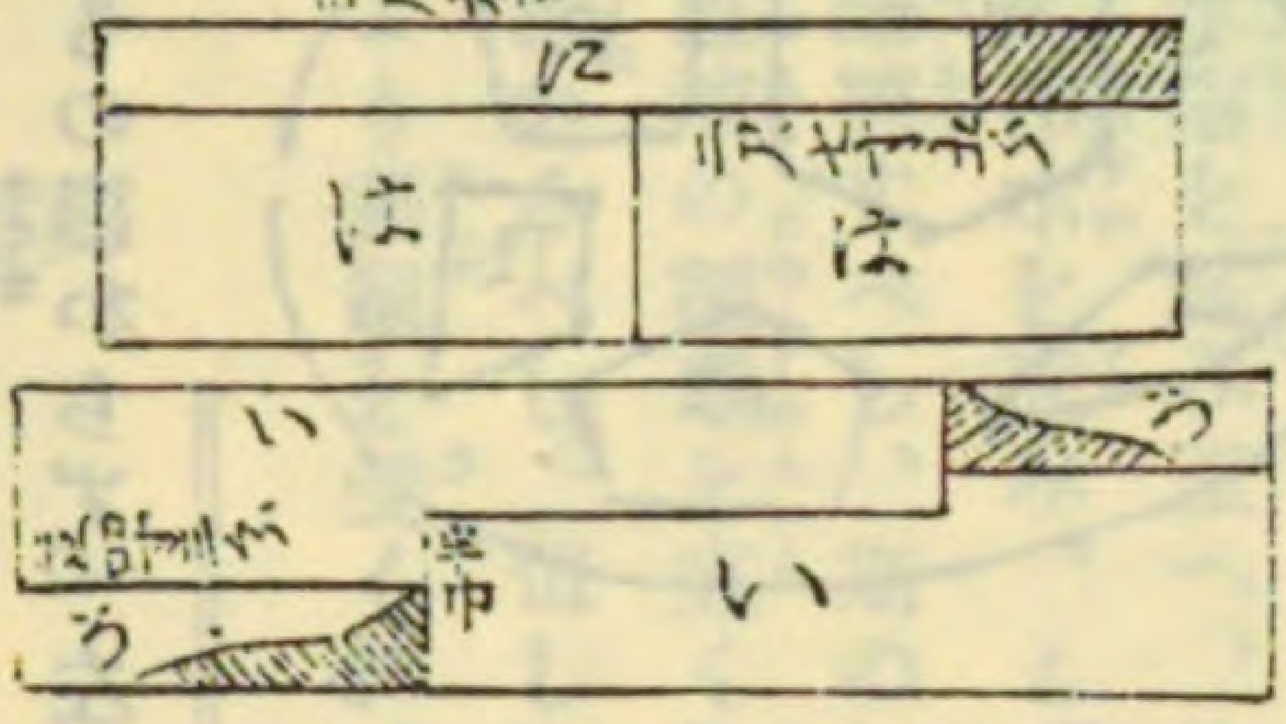
斯の如く小面倒なるものなれば縫合するには随分時間を要すれども、丁寧に縫ひ終れば之に裏を着け、兩端を縫合して直筒となし、之を卵形なる(い)の龜胴の縁に縫附け、別に(に)の首一個と(ほ)の足四個と(へ)の尾一個を製し(中に綿を入れて丸味を爲し布帛を以て之を製す)たるものを龜の胴に縫ひつけ、上なる巾着の口は他の布帛を以て縁をつけ、緒にて其口を引しむるやうにすれば奇麗なる龜甲の巾着を得るなり。而してこは龜形巾着の製法なれど龜甲は凡ての物(肘衝其他の装飾品)に用ゐて美麗なる製作品を出す。讀者試みに製作し玉へ。

三ッ身裁方の三法

小兒の三ッ身着る時は(四五歳)最も愛らしき盛なり。殊更女の兒は衣服も此年頃と十六七歳が最も金目のか

かる時なり。玆に三ツ身の裁方を記すれば

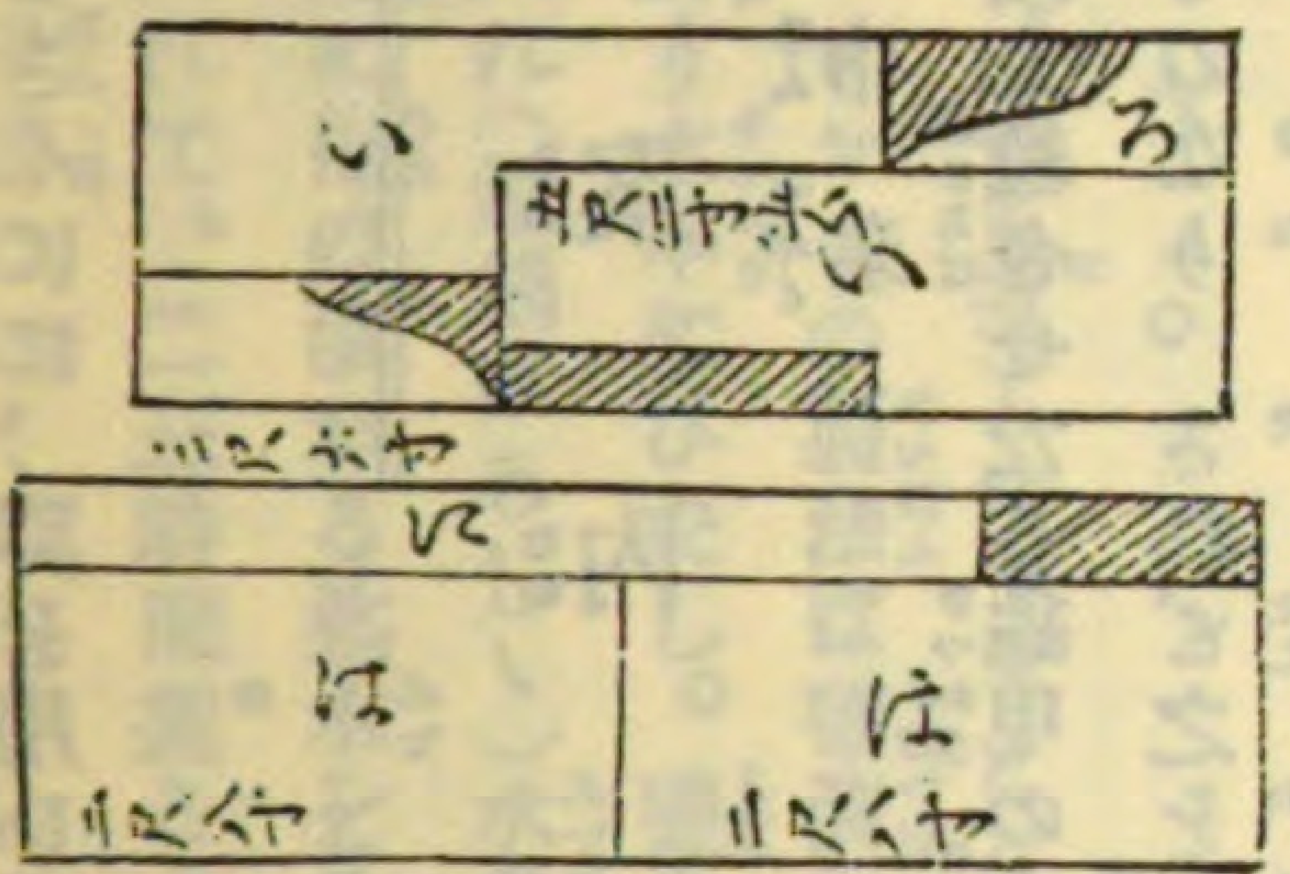
尋常の裁方



（い）みごろ　（ろ）おくみ　（は）、袖　（に）襟

これは尋常の裁方にして一丈三尺二寸の布を以て一領の三ツ身を製し得べし。之を仕立揚れば丈二尺五寸五分袖丈一尺三寸五分袖附五寸身のあき七寸褄下一尺おく身下り三寸襟丈一尺七寸襟巾一寸の佳衣を得べし。同じく紋織裁方を記せば（紋織とは表に織模様か形模様かあるものに——兩面用ゐる普通の反物と異なる所あれば裁方も異同あり）

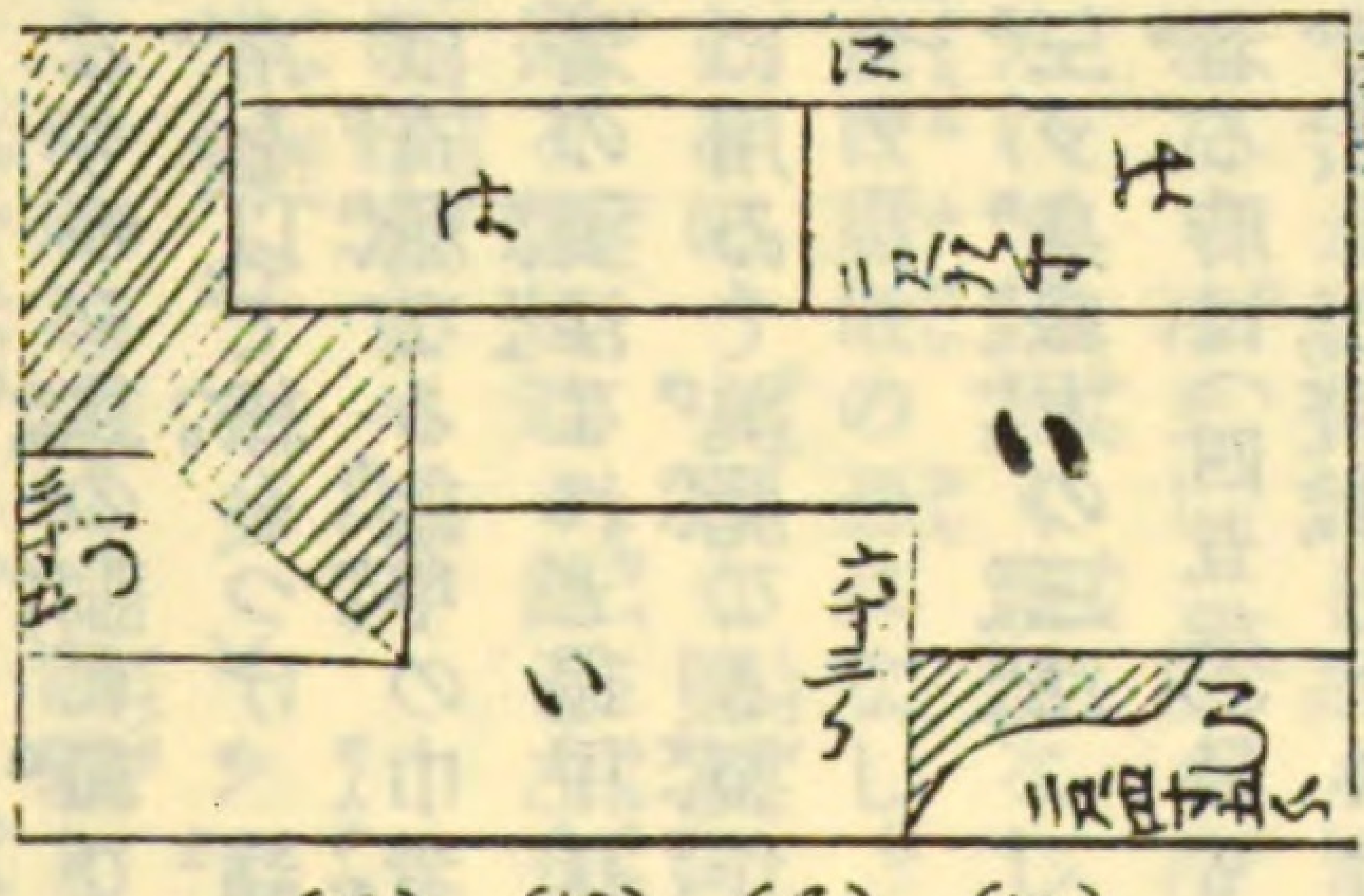
紋織裁方



（い）みごろ　（ろ）おくみ　（は）袖　（に）ゑり

更らに二尺巾の紋織裁方を記すれば（これは「フラネル」又は其他の大巾物）

二尺巾紋織裁方



（い）みごろ　（ろ）おくみ　（は）袖　（に）ゑり

上の裁方に依りて裁縫すれば間違ひなかるべし。

社交一斑

西洋禮式一斑（承前）

Y　H　子

食禮補遺

食禮は前號に大抵網羅し盡したれども尙ほ聊か陳述する所あるべし、

佛蘭西風——同國巴里の流行にて晝飯に人を招待する事あり、其獻立

の概畧を記せば、始に「ソップ」を用ゐず、第一に肉の大皿を出し次に番外食の數々、次に首食二皿、次に燒肉二皿、煮魚一皿、中食二皿、菜一皿、終尾に小菓子、糖菓を用う、さて／＼西洋人は大食なるかな、日本にては二の膳附の馳走と雖も大低品數も品量も大低極り居れども西洋人の大食は再度喫飯の外なし、少さき口元せる貴女等が食卓に向ひ餓虎の如き有樣は、到底一椀の吸物も喰へ耻かむ日本婦女の及ぶへき處にあらず、これは佛國人に限らず、凡ての西洋人皆然り（勿論日本人は飯を多量食し「おかず」を少くし西洋人は少量のパンを用ゐ、多量に魚肉を食へども）而して此晝飯の目的は要談等のあるが故に、食事終れば卷煙草を供し婦人は退座するを常とす、

露國風――露西亞にては中等以下にても客を招待するに食卓の裝飾に頗る贅澤を極む、先づ食卓の中央に花の盆栽を据へ兩端に一對の花瓶を置き其中間には一箇の盛物其他菓物砂糖漬等を盛りたる皿の數々を點々せる有樣は甚だ莊嚴を極む、而して其大宴會に於ては客席毎に獻立書を供ふ、又布巾の上には來客の名札を載せ置く、名札は美麗に采色したる紙牌なり、又食卓を去る時互に敬禮する習慣あり、子供は兩親の手を嘗むる風習を存せりといふ

名譽の坐――來客中に僧ある時は他客高貴なりと雖も僧（牧師）は第一名譽の位置なり、即ち主婦の右を占む、第二名譽の位置は主婦の左なり、又最も尊敬すべき婦客は主人の右、之に亞ぐは其の左なり、男客の第三位置は最も高貴なる婦客の右、第四の位置は第二高貴の婦客の左なり、若壻は譬へ身分高きも末席即ち食卓の最兩端に坐す、

給仕――二人なる時は一人宛ゞ主人夫婦右邊の賓客より始めて漸々末席に及ぶ、給仕一人なる時は主婦の右より始め左に回り次に右轉し、斯の如くにして末席に及ぶ、此順を追ひ最終に主人に食品を供す、主人或は主婦自ら給仕する時（勿論親友親族の饗應に限り）は高齢者又は婦客に皿を送り其次に少者に及ぶ、

終尾の合圖――主婦は食品終り談話斷絶の機を見て食卓を離るゝの合圖を爲す、此時來客一同直に皿の側に布巾を置き（疊まずに）起立して食堂を去りて客房に移るを要す、

食事中主人及來客の心得――主人は食卓に配慮する状を爲すべからず、譬へ食品不足又は疎忽あるとも來客の面前に於て給仕を叱咤するは無禮なり、客に於ても廻り來りし食品に不快の事あるも其事を顔色に出すは是又無禮の振舞なり、これは我國の禮式にも然かなり、昔時細川靈感公は賢明の聞え高き君侯なりしが一日島津侯の宴席に招せられ饗宴甚だ盛なり、侯膳部に向ひ將に箸を下さんとして俄に少しく腹痛の旨を坐客に告げて厠に上り、隨從せる侍臣に實は些しの腹痛なけれども飯椀の蓋如何にも粘着して開かず故に事に托して席を避け此由を告けんと欲したるのみと、侍臣驚きて侯の膳部を撿すれば豈圖らん空椀なりしかば始めて侯の意を悟り早速に飯を盛りて進めたりければ、島津侯の盛宴に一の失体なく料理人も譴責を免るゝ事を得たりと、又以て西洋の食禮にも應用し得べし、又來客は料理品に關し侯

するが如く或は逆ふが如き意見を述ぶるは禮儀作法にあらず、又非常に珍物にあらざれば非常に賞賛すべからず、

返禮――宴會の招待を受け之に應ずれば一家を形るものは返禮の爲に招待す、獨身者なれば一月元日に年玉を主婦に進するは巴里の流行なり、

答禮――招待を受け宴會に到りし時は、それより八日以内に答禮の訪問するを要す、名刺などを使者に持たせて答禮を濟すは悪るし是非自ら行くべし、若し招待を斷る時は必らず謝禮の訪問を爲すを要す、此手數を爲さゞれば大に禮式に適はざるなり、

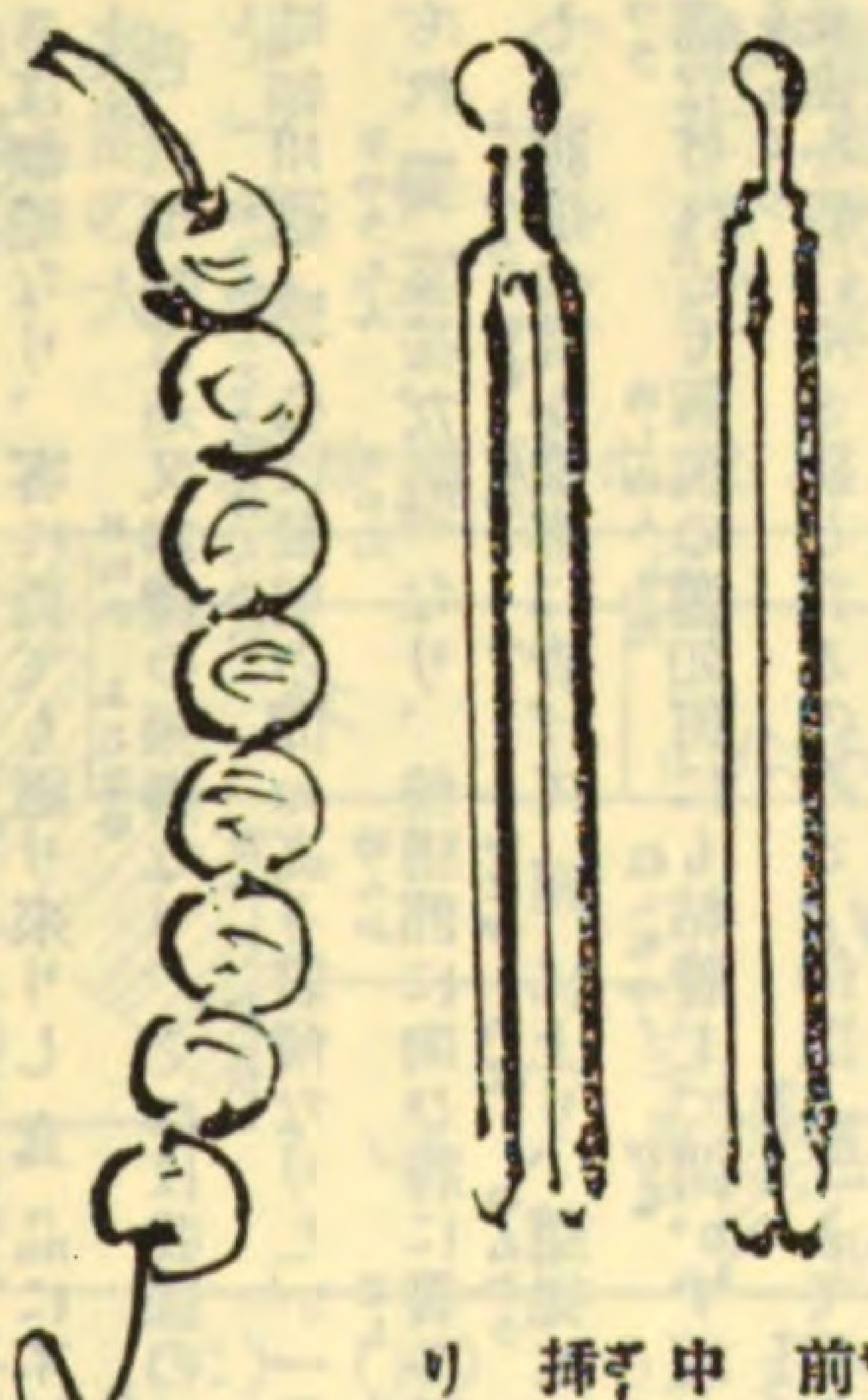
小兒の喫食――小兒は頑是なきものなれば他家に行き食卓等を汚して氣の毒なる事あり、此失体なきやう母親たるものは平常食事に臨みては、「ピン」にて小兒の襟に布巾を附し肉を食する時、「ナイフ」を右手に、「フホーク」を左手に持ち喫する毎に徐々肉を切り叉たは手にて「パン」を裂くことを習はしむべし、

流行の栞

春夢

淡泊なる髪具

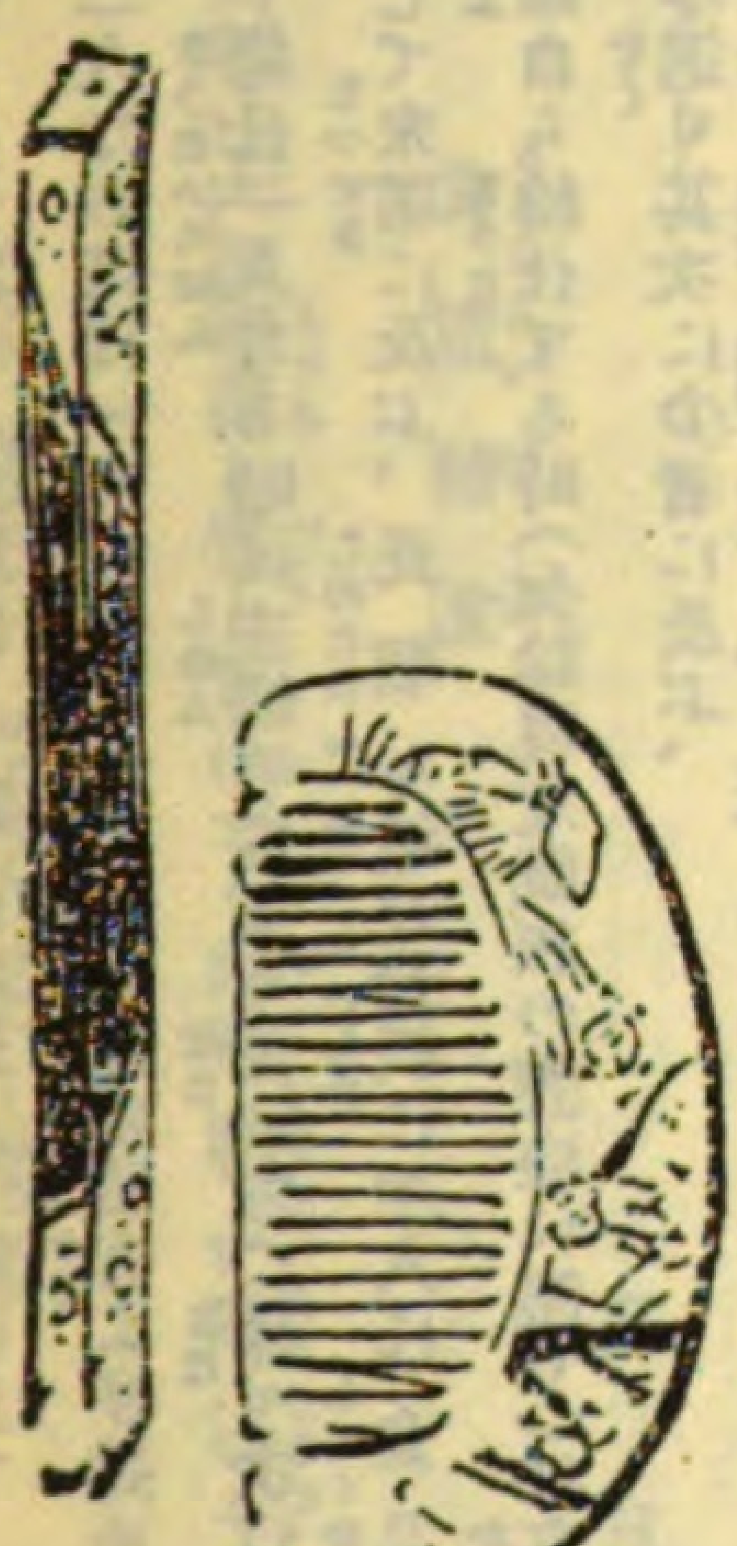
さて夏の流行となれば淡泊として涼氣なるを要するが故に髪具に於ても鼈甲や蒔繪の塗櫛などは不向なり、目下流行の最たるものは丁貝の髪具なり、丁貝と申しても知らぬ人もあるべし、鮑貝の如く一種の白光に得ならぬ光采あり、此貝にて種々の品物を細工し製品甚だ佳麗なり、左に示すは目下流行の簪及根掛なり、



前者はおばこ挿に適し、中なるは琴柱にして後挿となる（代價四十錢より五六十錢）後なる根掛も丁貝を丸玉にすり上げ大低四分八粒を用ゐ（四分七十五錢三分五厘七十錢三分六十錢）他に七枚折の管根掛流行す（巾五分價六十五錢）同じく丁貝のお初形の櫛は五十錢より一圓四五十錢迄の品多く行はる、

第二の流行は白檀の櫛にほひ床しき白檀の生地に淡泊なる金蒔繪を施こしたるもの多の都人に愛せられ髮櫛にて七八十錢差櫛にて六七十錢

新象牙



の虚最も賣口能きよし、(尾張町白牡丹にて盛に賣捌く)扨其次は新象牙の髮具なり、これは手に取りて見ても象牙に異ならざれど保持に於て多少の差あるのみ、目下流行櫛、笄の新形は圖の通り、但し二品一揃二圓四五十錢より四圓位、

其他「ツゲ」の達摩形は相變らず横町の嚊殿の鬢邊に横はりける、

「ゴム」の花簪



盆栽菊

勸工場を通行すれば美麗なる花簪が小間物屋の店頭に陳列せらるゝを見ん、而して本年夏の流行物は凡て「ゴム」なり、たとへ自然を離れし牽牛花、「ほゝづき」、薄、野菊、さては盆栽菊の人造花も佳麗ならずや

(以上一本十五錢より三十錢迄)、

而して此外に行はるゝは角脚「ツマミ」細工菊(廿錢より三十錢)又は絹製角脚蝶丸(廿錢より三十錢)又は「セラフ」脚牡丹(時候に遲れたるも)相應に行はる、

而して都の兒女の花簪の嗜好が、是迄は楠玉の如き四季の花簪の如き不自然なる、且つ美術的に適はざるものに向ひしが、今はビラ〳〵等の飾なき庭生の菊若しくば野面の萩桔梗の自然花を愛するに至り、少なくとも美術的の眼孔に漸進するは寧ろ喜ぶべき兆なり、

流行の「シャツ」





別段新奇の形あるにあらざれど少しく風の異なりたるは上圖の大鼓形なり、重に汗をはぢく木綿縮にて製し二十錢内にて勸工場邊に賣る乙圖なる「シャツ」は重に洋服に伴ふ新奇の流行なり、「シャツ」の襟飾縞柄と同じき縞柄の襟飾を附す、日本服の時は襟飾を取去れば直ぐに應用せらる、代價は三十錢位より五六十錢迄、襟飾と一緒に買ふと思へば安き者なり、其他麻の網襦絆、金巾の「シャツ」夥々行はるれども東京の粋なる紳士は「シャツ」を着ぬが肌自慢なり、

七寶燒の指輪と帶留金具

近來七寶燒にて種々なる精好品（煙管を始め花瓶、翫具、茶器等の裝飾品）を出す、瀬戸物としては先づ價格廉ならされど物によりて廉なるものあり、襟飾の「ピン」は十五錢位にて容易に精好品を得らるべく、銀臺に七寶燒を箝めたるものは一圓内に求めらる、近來風流の紳士等は金臺の七寶燒指輪を箝め居るもの多く見受けらる、又帶留の金具の代に用ゐ美觀他の金銀寶石の金具に讓らず、



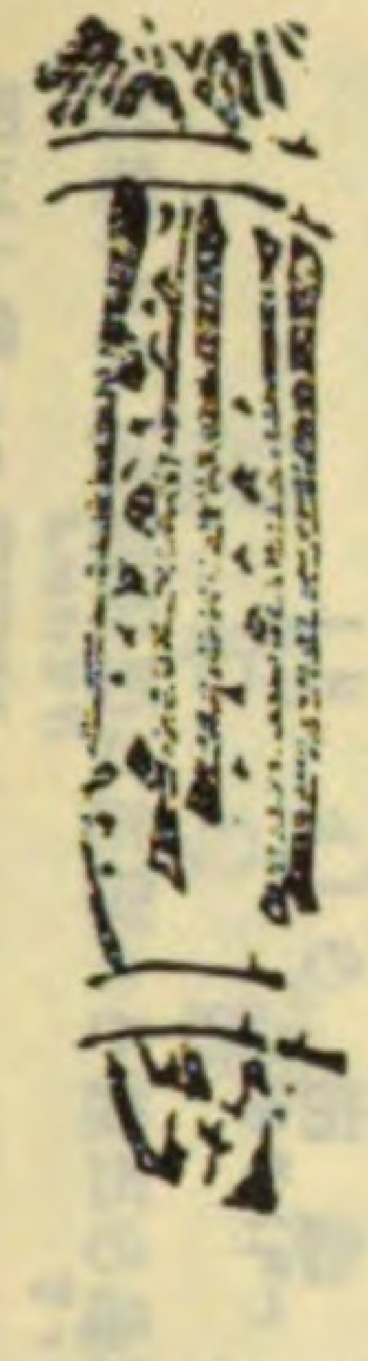
七寶燒　帶止



指輪

雲井結

帶留なり、雲井に近き御方より流行し始めたるにや此名あり、然れども價格は廉（十五錢より以上）なり、



雲井結

これは幽禪の縮緬に綿の心をいれ丸くくけて縫を施し金具を用ゐず兩端に些の房をつけ帶の上にちやつきり結びにする、これは若やかな人に愛せられ大抵十歳より十五六歳までの用品なり、

正誤　前號に織姫繻子の產地を八王子としたるは桐生の誤なり茲に正誤す

日用品物價

◎白米　前號に報道せし以來定期米に幾多の變化あり隨て小賣相場も若干の騰貴を顯はせり恰も前報より五等米に於て一斗二升、四等米に於て一斗其上は夫々直上げしたり即ち圓に付
●一等白米九升一合●二等白米九升三合●三等白米九升五合●四等白米九升九合●五等白米一斗〇三合

◎雜穀　これは前報より左程の事もあらず（一圓に付）
●新本貫麥三斗六升五合●新脇場大麥三斗七升五合●新裸麥二斗五升●新相州小麥一斗八升二合●同船橋小麥二斗〇●同上州小麥一斗九升●同常州小麥二斗〇八合●下總小麥二斗〇三合●千葉小麥二斗〇五合●札入竹林麥一八五並二〇〇●上割麥一八五並二一五

◎鹽　本齋と新齋と少々異動ありし迄にて其他は變らず無論小賣相場に於ても
●赤穗三俵七分●大鹽井八家三俵七分五厘●本齋五俵五分●新齋六俵二分

◎石油　前報より一升に付五厘又は一錢直上げしたる處ありさて其大相場は
●荏油十四圓十錢●桐七圓四十錢●坂水九圓十錢●地水八圓二十錢●一川久トイ九圓十錢●星印九圓七錢●いせ函入九圓十三錢●井桁一九圓二錢●胡麻十圓三十錢●ホーキ一圓七十六錢●チャスタ一圓七十四錢●上鐺一圓七十四錢

◎鷄卵　土用玉子として近日迄上騰目下大玉にて一個一錢七八厘中玉一錢三四厘小玉一錢一厘位

◎薩摩芋　婦人方の大好物薩摩芋の走りは昨今一貫目に付き二十錢內外

◎鰌　鰌々の賣聲は土用中より盛なりしが今も相變らされど直段は土用中より安直一升十三四錢位

繪畫

丹青叢談（承前）

燕隱生

四、熊斐、通稱甚左衛門繡江と號す、長崎の人にして家世々譯官たり、斐わかきより任俠を好みて膽氣あり、畫事を沈南蘋に就て學ひたり、一とせ長崎の富める人より斐に一幅を畫きたまへと請ひ求むるに諾ひなから三歲を經ても畫かさりけり、富人あまりのことゝは思へともせんなく、終に使をやりて、先にたのみまいらせし畫をはやく畫きたまはんには君か娘に調度衣服をとゝのへて、よき配偶をえらみまいらせて君の勞に酬はんといひいれけるに、斐きゝて大にいかりて、われいかに貧しくくらせはとて職は譯官なり、もとより畫工にあらさるなり、されは畫を餌として富人に貲をかりて、娘に配偶とらめやは、もはや畫をかゝんこと思ひもよらすといひ放ちて、直に畫絹を返へして、いかにいふもきかず、ついに畫かすしてやみぬ、

五、墨竹を畫くことに妙をえて平安四竹といはれし一人の宮崎筠圃はもと尾張の人なり、生來溫厚謙遜にしてしかも聰慧强記なり、十歲すてに詩をよくせりといふ、十三歲の時その母筠圃の背に灸す、筠圃頓になく、母熱に堪えずやといふ、答ていふしからす、吾聞く身體髮膚敢て傷ひやふらさるを孝のはしめとす、しかるに灸せされはかなはぬ病身なるを歎き侍るのみとその孝心終始かくの如し、かつて世人のその墨竹を請ふもの月に日に絕えす、母かくの如きを見て、いさめていふ、おそらくは人汝をもて畫工とせんと、筠圃これよりまた筆をとらす其後故郷の甥の家に投宿せしとき、甥紙筆



を出して謂こと頻にしていふ、母君にはよきにまうさん一筆そめたまはれかし、吾にして君の書を藏めすはあるへからすと、夜一夜責けれとも終に筆をとらす、一たひとゝめし言を食す、甥なれはとて私せさるなりといふ、

六、春木南湖かつて上野國に遊へるときある日破衣垢裳を身にまとひあるは素裸あるははだぬきしたる荒くれ男五六人輿をすゑて途に待うけ、南湖のきたれるをみて、いなむをきかてうち乘せて林の方へと急くに、南湖あまりのことにうち驚き、こはそもいかなることかやと安き心もなかりしか、やかて林の中ほとと思ふころ、輿を下すに四邊を見まはせは、かたへの方に毛氈をのへ紙墨なとならへて、書をかく設あり、ときに衆みな頭をたれていひ出るやう、われら先生の盛名を聞きせめて芳名はかりにても書きてたまはらんと思へとも、賤しき身にては先生を迎へん席もなく、また資もなし、されはこゝにかく設けたれはまけて一筆染めたまはれかし、さきにこの事をも告けまいらせす、驚かせし罪は幾重にもゆるしてよと、ひたすら賴むに、南湖も心はしめておちゐて、そはやすき事なり我はもとより藝に遊ふものなれは、これたけの紙書たりとて何の勞のあるへきそと、直に筆とり上けて書きて衆にあたふるに大によろこひて、また輿によせて十餘里がほど道を送りけるといふ、いともおかしき話なりけり、

七、立原杏所名は任字は遠卿水戸の藩士なり、藩主烈公の恩遇をうく、人となり廉潔にして學博くまた丹青の名あり、嘗て上毛人眞下某なる人江戸にきたりて明人陳子和のものせし狼の圖を買ひ得たることをきゝて一度みまくほりすれとも官務いそかはしくして思ふにまかせす、ときにある人杏所に告けていふやう、某は今日中に國へ歸るといふ、君か日頃見んと思ひゐたりし幅もついに見すにやまん、おしきことにあらすやと、杏所聞よりにはかに公の廐につなける馬を借りて小石川のやしきを出て、いそぎにいそぎて馬喰町なる旅宿にいたりみるに、某すてに旅の仕度を調へ終りて

いま出て行かんとするところなりしかは、直にその來れるよしをいひて幅を見んことを請ふに某もその志のあつきに感じ調へたる行李を解て之を見せしといふ、

八、毫を甜め墨を啜りて世のたつきとはすれとも志は國家にありて片時も忘れす、ことに外寇防禦に心を用ひ、日頃こらへこらへし慷慨はついに一冊の鴃舌或問となりはしなく罪を得て配所の月にうき秋をかこちしは華山渡邊登なり、登は三河の人にして田原侯の近侍なり、畫は金子金陵及谷文晁に學ふ、登公私の餘暇には古き書畫を熟覽して六法の諸典を索めまた俗人の言



といへとも耳をかたふけ心を留めてこれをきく、また人を憫れむこと深く屢々窮乏者を賑恤せりとそ、登平常雁皮紙にて綴ちし小冊を懷にして役所にあるも、輿の中にあるも、あるは道行くときも、はなすことなく、眼にふれしものはみな摹しとりしといふ、今世に行はるゝ一掃百態もこれよりぬきて畫きしにやあらむ、曾て稲垣侯より賴まれし大幅彩色の牡丹をゑかきて勾勒ほゝ成りしころ、にはかに、おふやけの用事出來しかは、筆なけすてゝ立上り、召し使へるものに牡丹の葉の裏に白緑をぬりくれよと言ひ置て馳せ出ぬ、用事果て家に歸り見れは召使の者いかにして聞き違へけん裏葉に彩るへき白緑を花英の裏にぬりはてゝのち、それと氣つき、ひたすら、その誤りを謝るに、登すこしも尤めす、笑なから筆とりてつくろい直せしといふ、華山いかなる酷暑長日の時とはいへともいまた假寐をせしことなく、たま〳〵他の人の晝寐するをみても切にいましめをくはへしとそ、

九、華山の高弟椿椿山名は弼字は篤甫、大橋訥庵と友として善し、椿山訥庵とともに片山流の拔刀法を庄内某に、笙吹くことを丹羽某に學ひたり、されと椿山はいそかはしき人にして訥庵は多閑人なり、しかるにそ

の伎、椿山の方まさりければ、ある日訥庵その故よしを問ふ椿山こたへいふ、われは君もしりたまふ如く終日人の爲に畫を作り居ればなか〱ほかの技學ばむひまもなく、よりて自から嚴しき掟てを定め、朝はまだきに起きて拔刀を稽古なし辰時のときにしてやめ、また、夜筆をならふて三更にしてやむ、これ或は君に贏るゆへならめと訥庵きゝて大に感じあへりといふ、

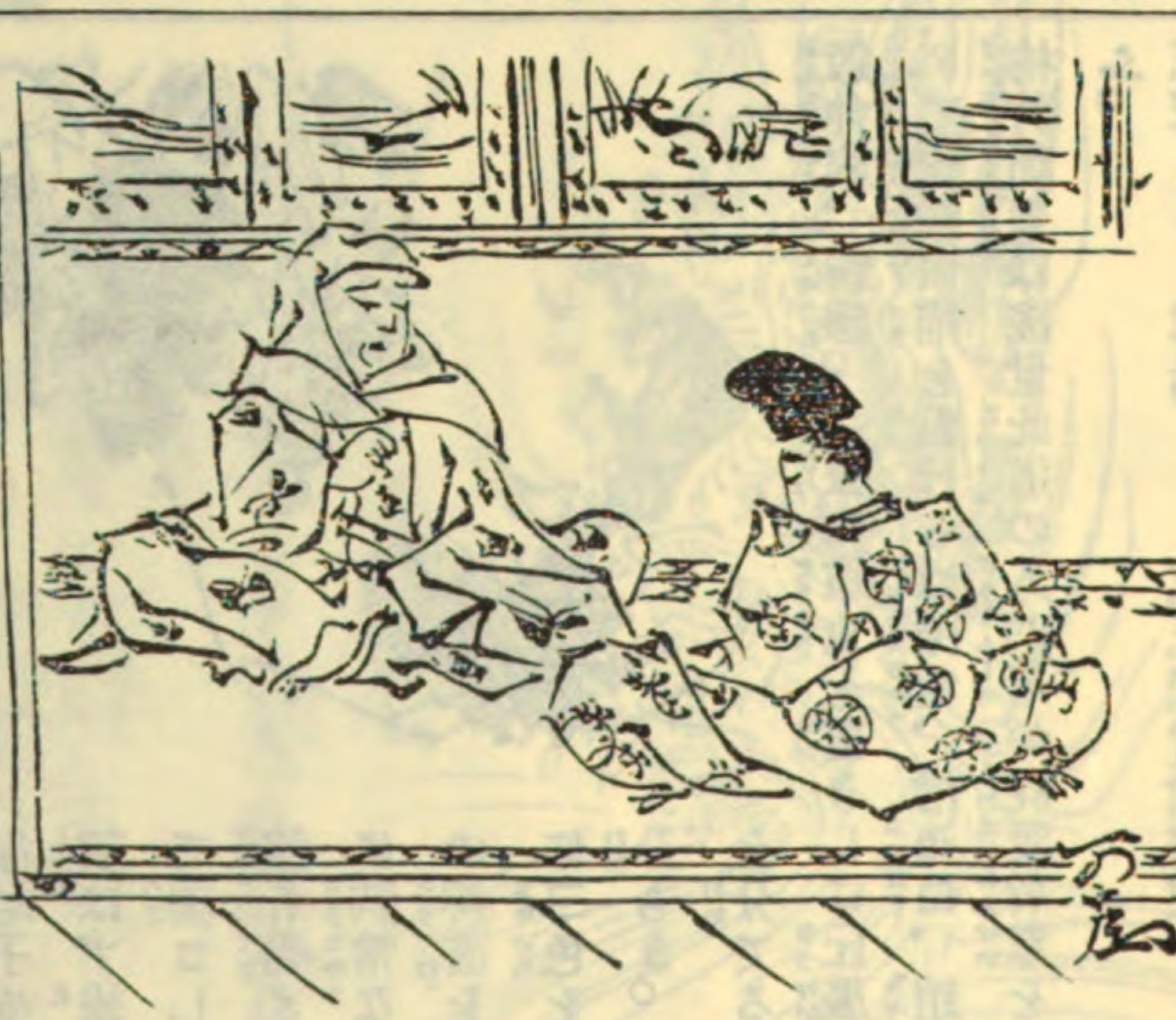
十、吳俊明は越後新潟の人はしめ狩野氏に學ひて後元明淸諸家の法による、其畫を學ふに一樓を作り之に登りて下らさること四十年に及ひ家のものもしかと其面を觀さりしといふ、俊明性酒を嗜ます、或人勸めいふやう酒は愁を掃ふ帚なれは少しにても飮み玉へ、俊明いはく君の志はけにうれしされとおのれ幸に靜けき御代に生れて六經のをしへに薰沐し、また詩書畫にあそひていまた愁といふことをしらす、すでに愁をしらねは帚を用ゆるまでもなしと、

十一、寛政の比牛込二十騎町邊に田阿子といへる者あり、土佐の畫風を好みてしかもよくせり、性寛悠にして人と爭ふ事なし、ある時牛込柳町より火出ておのか家もあやうく見えしかばえう〱六尺ばかりの大横物の掛幅を持出し、これを背負ひて飯田町邊の友とちの許へのかれ行きぬ、折から西北の風烈しくこの友とちのあたりは風筋あしゝとて立ちさわける中へ行くに、友は君はいつくへ行き玉ふそまた背負ひたまふは何物にかと問ひければ、我家の近きわたりより火出たれは、この掛物はかり取出してこゝまてのかれてきつ、今人にとへばはや我家もやけたらんとおほゆ、さきのほとより走りありきたれは空腹になりたり何にても少し玉はらんといふに、有合の調度をしきやふの物に取集め飯を出したれば心よく食ひて、さて此一軸は探幽齋か畫たる鷹なり、いかにも世に有かたきものにてことにすぐれたるものなれば火にやかん事のおしくて是はかり持出たりこれ見られよとひらきて見せけり、折しも又火も廣くなり風もつよくなりたりとて人々の立ちさわくに友もこゝろおちつかさるを田阿子しるやしらずや、こゝを見よ鷹の眼中よく書きたり、かしこの羽

の毛がき見事なりなどいへども友は耳にもいらす目にとまらず、とかくするほどにやゝ火もすこしきづまりぬと聞えたれば田阿子は禮をのべて歸りぬ、これ眞秀と一對のはなしとやいはん

十二、淺草観音に詣てしものは誰もしるらん、その片隅に懸けたる頼政怪物を射るの額を、そのかみ高嵩谷これを畵き懸けたるのち潜かに見る人々の中にたちまじりて、いかに此圖を評するならむと聞きゐたり、ある日一人のものいふ平家物語には猪の早太九刀ぞ刺たりけるとあり、いまこの畵を見るに刀を高く閃かして頭の上にあり、これにては本文にかなはさるやうなりと、難し行くものあり、嵩谷素より本書をも讀まで、そゞろに畵きたるものなれは、これをきゝて大に恥ち、終にこれを削り改めける、

十三、浮田可爲一蕙と號す、京都の人にして畵院の生徒なりし、そのかみ、兒島高德の裔なるを以て慷慨志を王室に存し、常に陵夷を嘆きゐたり、嘉永のころ攘夷の論盛に起りたれは、可爲喜ひて、これわれらか御國に報ゆるの秋なりけりとて、其子可成を萩藩の卒伍にならしめしが、程もなく幕府外國と和せりときゝて、いかりに堪えず、これより畵を乞ふものあれは、神風虜船を覆



へすの圖をゑかき與へしと云ふ、是歳大内裏を造營せられ可爲に詔を下し賜ひて御屏風を畵かしめたまふ、もとの御屏風は德川家光の獻りし子の日遊の圖なりしか、内裏炎上の時失しものなり、されは可爲はこの

子遊の圖に優りしものを作らばやとて經營久しくして出來上りぬ、その絶妙なること舊畫に倍せりと、ときに外患しきりにせるを可爲いかで默してやむべき、某の公卿によりて時務の策を上る、かしこくも天皇御覽を賜ふてその御屛風を畫けるものなるを知りたまひ大にその志を賞し賜へり、可爲その時の喜はいかばかりなりしぞ、

無聲の詩話（三）

花鳥畫は繪畫の術愈進みて一鳥一花をも特別に畫き成すやうになり、遂に之が專門の名家も出で來りしなり。

五代の末より宋の初に徐熙黃筌とて花鳥畫の二祖ありき、徐は猶山水畫の王摩詰の如く、黃は猶李思訓の如し。

徐は處士にして氣品高く、花葉を墨筆もて艸々し、色を施すこと淡く、專ら神韻を尙べり。

黃は畫史にして、墨がきも細かく、着色鮮かに、極めて美麗なり。大に世人の爲めに喜ばれき。



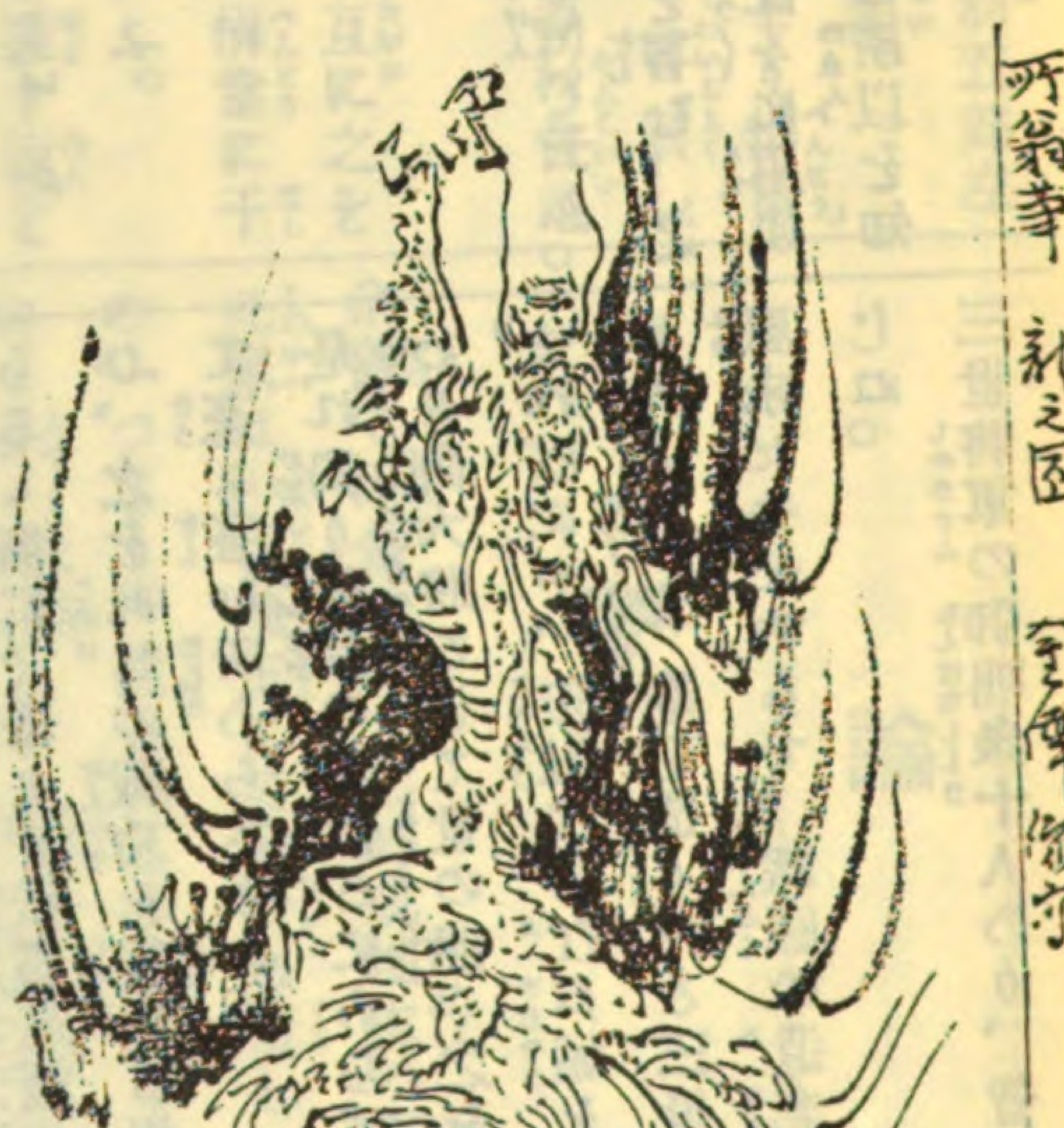
徐が子崇嗣は家法に隨はず繪の具のみにて美はしく描き出し沒骨畫といひぬ。後に劉常なるもの沒骨の艸畫をなし、一筆に二色を交へ花葉を分ちき。墨筆にて色を分てるは劉夢松、殷仲容、鐘隱。一筆に草虫を畫きしは丘慶餘。飛白筆にて雙鉤白描を畫けるは陳常、僧帀白、趙孟堅。

梅竹蘭菊は後世此道の入門者が花葉幹莖を畫がきならふ。

畫梅は初め彩色せしを花光和尙墨梅を畫きぬ、世に

花光梅といふ。揚補之は花を一筆に畫き之を圏法といひき。二人を墨梅の宗とす。」竹は文與可墨の濃淡を分ちて奇趣を出し、蘇東坡亦畫きし、皆蕭散。蒲萄畫に僧日觀あり、畫虎に包家の虎あり、包貴、包鼎以下子孫之を業とす。畫馬は韋偃小馬を一筆に畫き、李用及は病馬を畫きし。畫龍は三停九似など云へる法ありとぞ、是は全身を畫くもの。而して陳所翁、牧溪は





首ばかりを畫き雲烟の間に足をすこしくあらはせり。

又畫獅子は閻立本あり。

此等を皆な東洋美術の摸範となりしものにて、日本繪畫は實に其多くを之に資したりき。

雜録

遺珠顆々

○我儘と云ふ事は人の上には能く咎むれ共己の身には常に潛み居るものなり　ピーチャル

○愛は往々不消化によりて死することあり未だ曾て餓死することはあらず　テンドルアンクロ

○世の中は考ふる者には喜劇なり感ずる者には悲劇あり　ワルレル

談叢

節儉と吝嗇

用ゆべきに用ゐんが爲め財を節する、之を節儉と云ふ。用ゆべきにも用ゆべからざるにも只管に財を吝む、之を吝嗇と云ふ。而して吝嗇なるものは却て往々に用ゆべからざるに之を用ゆる事あり、財の財たる所以を知らぬものと謂ふべし。

織田上總介信長は當時吝嗇第一と聞えたる人なりき。去れども彼は其實吝嗇にはあらで節儉なりしなり。彼は少き時極めて角力を好み、人を集めて之をとらせなどしけるが、三番勝するものには褒美として燒きたる栗三つゝを與へける。其しわき事知るべきなり。然るに彼が幼年にして尾州清洲近在の寺へ手習に行ける時の如き、四五十人の相弟子五月五日の休みに例によりて印地打の遊びをなしゝが、彼は此戯の演ぜらるゝ毎に、母より紙墨筆飯米三斗永樂錢一貫文を貰ひ、之を此日の戰功を賞する用に充てなし、用ゐ盡して毫も吝む所あらざりき。

是れ獨り信長のみ然るにあらず、家康の如き亦最もしわき御大將として世の能く之を知る所なり。去ればにや、宏壯なる江戸城を築き成し天下の美を鍾めたる日光廟を造りたる三世將軍家光の時さへ、此風未だ失せやらで、戰國の遺老は依然儉素の奉に安んじぬ。

三世將軍の御咄衆十人あり、皆一世の英傑にして多く

は戰國の遺老なり。即ち毛利甲斐守秀元、丹羽五郎左衛門長重、蜂須賀蓬庵至鎮、林道春信勝の類。

而して此等の人々が登城するには、皆其屋敷より辨當を持來らしめ、晝に至れば蔀の間にて相共に會食しけるが、其心やすく又侈らざりし事、今の田舍の村會に議員の集へるよりも心やすく又侈らざりき。

彼等は其中誰にか珍らしき菜などある時は、互に之を取り交はして賞味しける。一日毛利甲斐侯の辨當に干鰈ありしとて人々とりわけ珍らしがりしといふ。

是故に其一人なる阿部對馬侯の如きは、自ら握り飯を紙に裹みて袂に入れ來り、食し畢れば包みたる紙につきし飯粒を拾ひ食ひ、紙をばしばをのばして鼻をかみなどしけり。

アゝ三百年の太平の致されたる、偶然にはあらざりけるよ。

論　說

奢侈

鐵斧生

余嘗て田舍に在りし時或地主の家に寄寓せる事あり。此家は中等地主にて家計も苦しからず、近在富める者の一つなり。然るにこの頃頻りに經濟の困難を訴へ、余も屢々細君より、數々の愚痴を聞かされし事ありき。思ふに此事はこの家のみに非ざる可し。總て言へば、地方人民の骨とも、中心とも言はるゝ、中等地主の家計は近來頗る宜しからず、愚痴は到る處に在るものゝ如し。余が彼の家にて看察せる處にては、これ全く奢侈の結果なり。凡て奢侈は惡習なる中にも、近頃地方に行はるゝ奢侈は、性質至て宜しからず、家庭の空氣を腐らし、其健全を壞る、これより甚しきはなし。余は

少しく例を擧げて大に諸君の反省を乞はんと欲す。

第一は衣類なり。交通の便利開けて、都會流行の品物、容易に鹿の鳴く山奥までも達し得る結果は、今日まで手織木綿のゴリ〳〵を着て安んぜし人々が、かれこれ流行の善惡を評して、其爲めに少からぬ金錢を投じて顧みざる樣になりぬ。善き物は善し。惡しき者は惡るし。旣に善き物ならば着用せざるが損なり。されど流行の品物は常に善き物と限らず。大概は外見のみ人目をひくに足れど、品質の點より、價値の點より、田舍びとの爲にならぬが多し。然るに其の流行品が容易に手に入りて評判高きが爲め、今日迄で三反織りし木綿は一反に減じて、其代りに流行品用ひらる。それが爲め今まで細君、娘、下婢等の仕事にてありし、絲ひき、機織をり等の勞働が如何に少なくなりしかを思へ。勞働の少くなりしは、怠慢の多くなりし也。勞働と云ふ者、殊に家庭に於ける勞働なる者は、只だ算盤の上の慾德づくのみにあらず、其の利益は言ふ可からざる點に極めて多きなり。故に他に儲多き內職かあれば兎も角只だ流行の反物がほしさに、絲ひき、はたおりの勞働を廢して一家の中折角の仕事を減じ、其が爲め怠慢の風あらしむは實に宜しからず。況んや、木綿のゴリ〳〵に代ゆるに、一時の瓦斯織の外見よきに迷ふに於てをや。

其の次は時計なり。此事は嘗て民友記者が「金時計を携へたる餓鬼を道傍に見る決して遠に非ざる可し」と痛言せし位にて、地方中等社會に在りては、時計は實に身代不相應の奢侈を極め居るなり。之れ亦流行を追ふか故なり。田舍程時間に當のならぬ處はなく、而も田舍程時計の名譽有る處なし。少しく外郭の壁白き家にゆけば、內外已に時計の秒をきざむ音聞かるゝなり。而して主人は必ず少なくとも銀側時計を懷中し居るを見ん。此の有樣を見る時は、定めし家庭に於ける

時計の効用も多からんと思はゞ誤なり。時計は流行の飾なり。奢侈なり。矢張家事に秩序なきは時計なき家と變る事なし。

第三は下男下女を澤山使ふを見えとなす流行なり。これは官吏の家庭に最も多かりしが、近來は中等地主の家庭にまで、此怪しからぬ風儀を見るに至りしは嘆ずるに堪たる話なり。或は娘を孃樣と呼ばしめ、子供を坊樣と呼ばしめんとてか、下女を要せぬ家に迄で、下女を置かるゝ風儀あり。其の害は啻に經濟の點のみならんや。子女をして徒らに驕らしめ、其の結果言ふ可からざるものありと知れ。

其他、子女が登校に着飾らしむるか如き、又た地方に於ける近來の流行なり。これは學校の教師に罪ありとするも、父兄たる者亦た大に顧みる處なくんば、口に勤儉を説て實際子女を驕奢に慣れしむるものと云ふ可し。猶ほ細密に例を求めば、余が知らざる流行の奢侈多からん。唯余が言はんと欲するはこれなり、則ち、流行を追ふ事は徒に奢侈に陷る弊害あるのみに止まらず、家庭に眞面目の風を失なはしむる事是れなり。浮薄の風を導く事是れなり。中等社會の人々が近時反省の第一は思ふに玆に在らんか。必ず玆に在る可し。

時事一斑

大學令改正

改正の要旨は、講坐を開き、名譽教授を設け、職務俸、講坐給の制を定めたると、幾分か獨立の方針を採用したるとなり。固より改正といふ程の改正にはあらねど、之を舊時のものに比すれば寧ろ喜ぶべきは勿論なり。

俊見

北里博士去哉の歎ありと云ふ。六十州、四千萬の人、豈一の俊見を容るゝ能はざらんや。

家庭の大變事

何等の怪事ぞ、何等の大變ぞ、是非竟に歸着する所を知らずと雖、相馬家の謀殺事件は現に明治の今日に小說の如き恐ろしき御家騷動を演ぜんとするなり。骨肉君臣の間復た言ふに忍びんや。

嘉　賓

嘉賓來る、墺國皇嗣フランツ、カアル、レッドウイツク親王はカイザリン、エリサベット艦に乘じて來れり。

東印度の風雲

暹羅、佛蘭西と事あり、東印度の風雲方に暗澹として見へき。暹羅遂に城下の盟をなして事平きぬ。

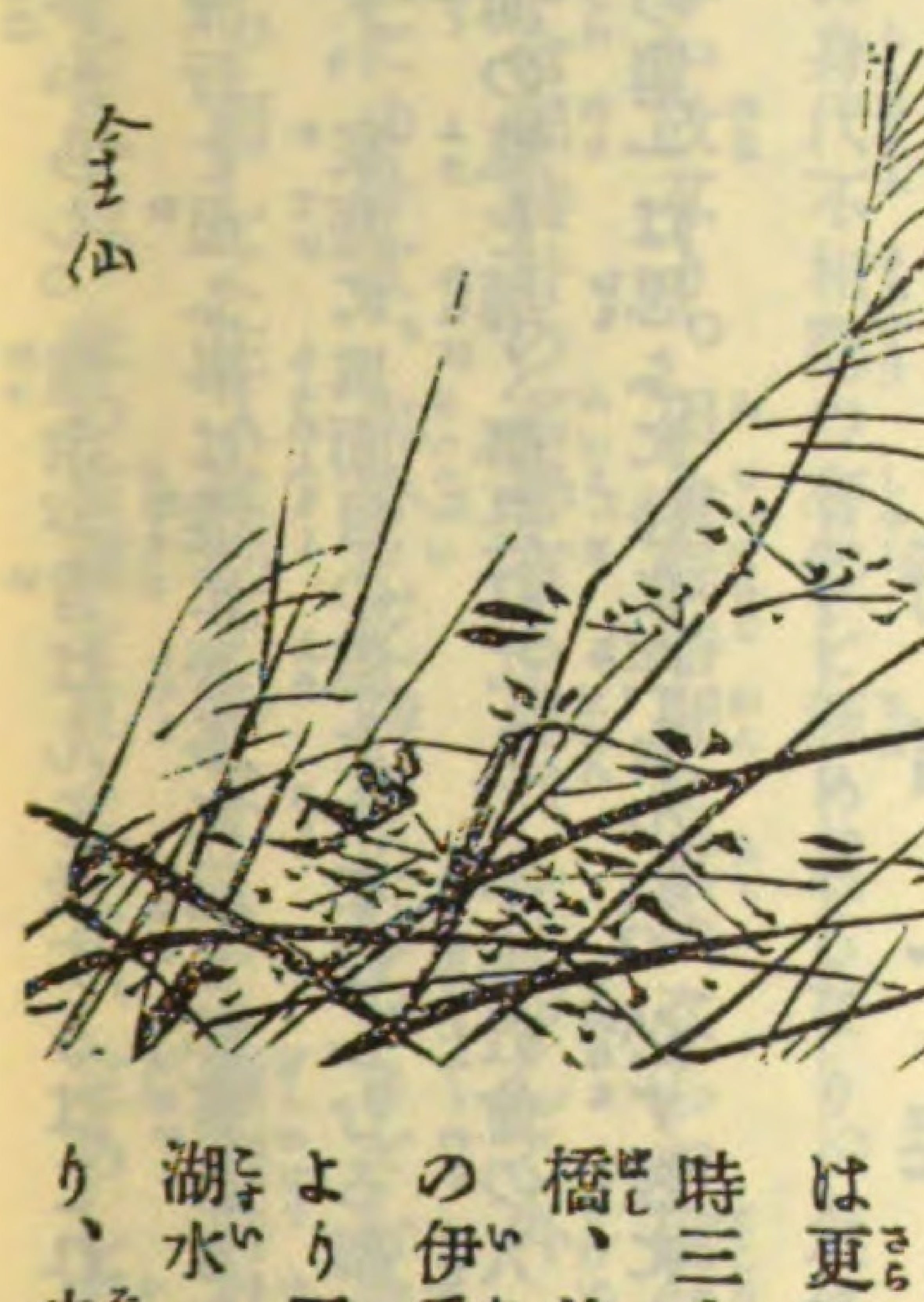
蕣

咲きかへ〳〵て朝々新なる蕣、露の乾ぬ間の盛りの色鮮かなり。時に及んで努力すべし、秋風白髮の日に逢ふこと勿れ。

行　樂

三伏の熱を洗ふ瀧は、綠り涼しき瀧の川の辨天窟のかたはら、古木欝蒼たる目黑の社前、幽邃なる角筈の十二社、鄙びたる道灌山下の日暮里、團子坂藪蕎麥の下庭、皆一日二日の炎塵を避くるによし。

遠く殘暑の外に在らんとには、都の北門上野停車塲より去べきもの、大宮公園滊車五十五分間程、日光五時二十分間程、鹽原温泉四時廿分程の那須より六里、十一時五十分程の仙臺、仙臺より三十五分程の鹽竈、鹽竈より二里の松島、上野五時間程の水戸、三時五十六分程の磯部、磯部より妙義、霧積、或は更に輕井澤、三時三十七分程の前橋、前橋より數里の伊香保、伊香保より三里の榛名山湖水あり奇岩あり、夫より北西に



十餘里を去る草津、内藤新宿より甲武鐵路を去る一時十六分程の八王寺より二里なる高尾山、都の西門新橋より行くべき鎌倉一時二十八分程、橫須賀二時十一分程、江の島一時卅分程の藤澤より一里十四町、大磯二時間程、箱根湯本二時二十二分程の國府津より二里、熱海國府津より九里、沼津新橋より四時三十分程、興津五時三十八分程、靜岡六時四分程、金澤八景橫濱より陸行三里、南は鹿野山上總の木更津より五里許なり、滊船越前堀木更津間毎日午前八時に發す、房州北條及ひ舘山毎日午前六時に汽船便あり。

若し夫の波上風靜かに釣を垂れんとする者は、かいず、こち、臺場近傍より大橋邊にて綸を引き得べし。魚餌は鰕、しらた鰕、或は小蟹、袋いそた、而して鰕蛄最も可。

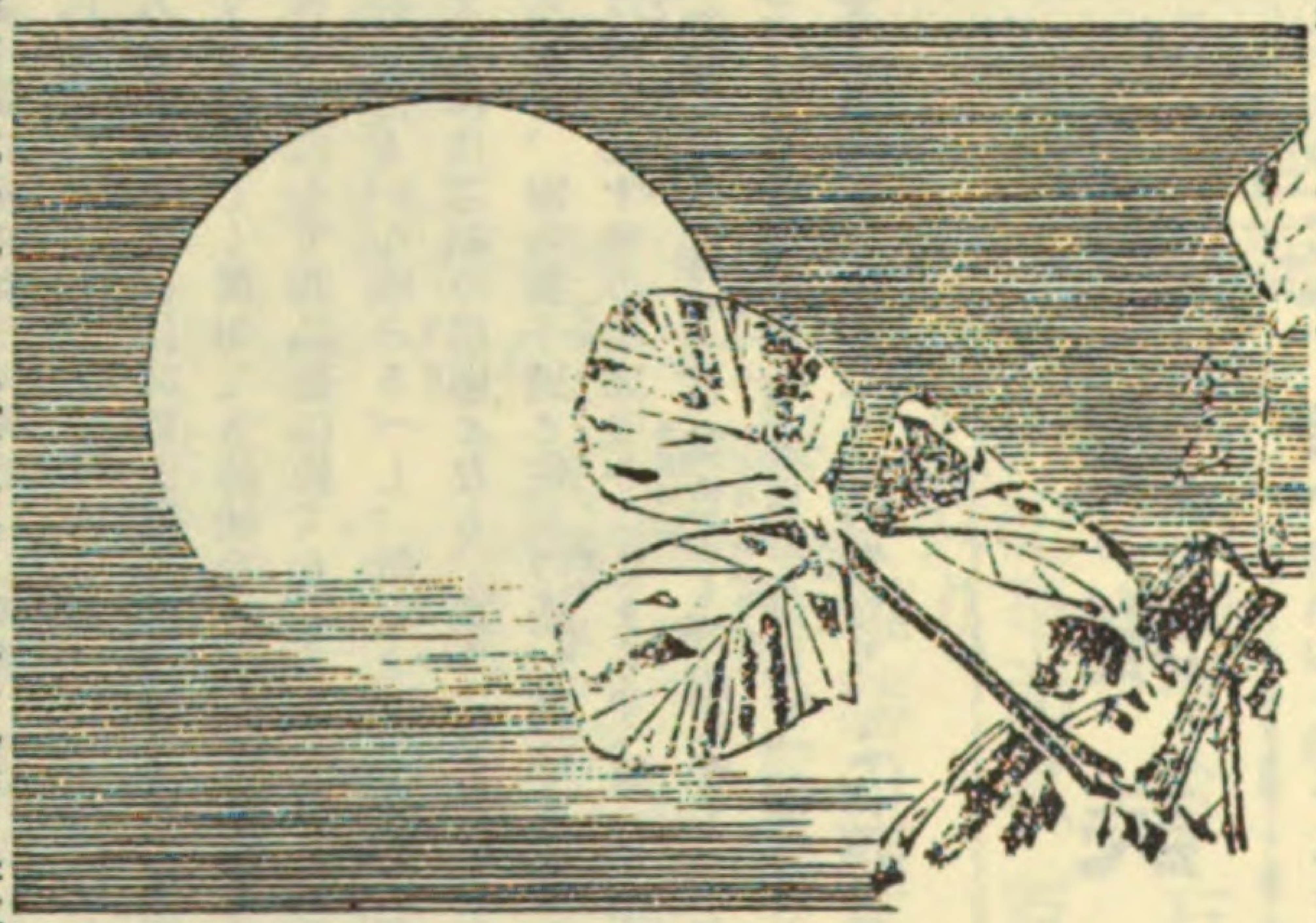
鯖また漸くよし、釣場は永代橋邊、仙臺堀邊、深川扇橋より南若干町、中川大橋邊、中川おひおひ邊、法恩堀筋。

鯰は隅田綾瀬合流の所、小梅引舟通り。

沙鰮は恩法堀筋、東永代町河岸、中川筋西舟堀、材木河岸、魚餌はごかい又は蝦の切り餌、岡釣は蚯蚓。

而して暑熱は未だ去らざるに桐の一葉早秋を音づれ、野邊の夕風も自ら澄み渡るめり。

観月の宵は招かざるに來らし、今年も巳に半は過けん。



観るに堪ふべし、白雲に羽打かはし飛ぶ鴈の數も見ゆる月の夜半、零露無レ聲濕二桂花一。

都下の観月地は、品川、高輪の月の岬、海上の明月潮と共に生ず。愛宕山、九段坂、不忍池畔の風清き頃、神田明神、湯島天神、待乳山、綾瀬川、隅田川、中洲、それ〳〵にながめは異なれども影は同じ。

授書

妻を擇ぶ事（承前）

在本鄉　かすみ女

學事諸藝にも暗からずしてよく物事を辨へたろは貴し、されども何事も知りたらんやうにて、鼻うごめかし我わ顏にたち振舞ふ女は傍に見るも惡く／＼しきものなり、其夫まで人に忌みきらはろゝに至ろ。「智惠ある女は其家をたつろ」さいふ、彼はものゝ分限を鑑みて節度をあやまらざろが故なり、さばれ智惠も愛には及ばず、學才智能仰く程なろも底意に實なき女は蛇蝎の如し、忍耐も温柔も、寛容も勇氣も皆愛の泉より湧出るなり、故に愛なき女は利己心に打勝ちがたく人の情をも酌み分けがたし。愼み深き女はたさひ諸藝に通ぜざろも利發に神妙に見へ世間の交際もうさからず、只諸人に愛嬌なきは怨敵を作り易く夫の限界を狹むろものなり

衣服髮飾なども些細のことに似たれど、あまり派手やかに粧ひたろは心の程も見透されていとあさまし、女の職業を營むとは、一家の幸福にさせろ必要もなし、まして富裕なる家に於てをや、併しさるほどの心掛もなき女は一家族の獨立心をも養ひがたし。ものぐさき主婦は婢僕をも不精にし懈怠なる母は其子を懶惰にす、女にして縫針のたしなみなきは夫に始終襤褸衣を纏はせて耻かしさも思はぬものなり、算用にうさきは家政を亂し、大なる不幸をきたす、一家の風波は會計上より起ろと多し氏も育も賤しからず、年若くして貌もさほさ醜からず、諸事にも渉り心操よきは最良の妻なめれさ、不完全の世の中にかゝろ人を求むろは難し、只愛心深き人こそ望ましけれ、愛は人のすへての缺點を蔽ふ、其他のとは陽炎の如し、しばし浮世の夢の跡さ消ねうせんなれども、眞正の愛は永劫變ろとなし、

さて愛心深き女さて偶然にしては、彼の心を知らんによしもなし、こゝに簡便にして尤もよく其人さ爲りを知る良法あり。まつ其母は如何なる人なりや、又彼は父母に對して孝順なるよき娘なるか、其同胞朋友に接するに睦しく親切なる姉妹なるかを尋ね觀るへし、而して汝が滿足し得べき女にして其品德に於ても賞するに足るものさせば之さ共に汝は彼を敬し得るかを顧みるべし、敬なき時は狎れ、狎る時は互に欠點を見出して遂には不和の起因さなる、或人は云ひにき不良の妻さ共に一生を送らんより、寧ろ獅子狼さ住ふの遙か優れるには如かじさ、あしき妻を娶ろは汝が五十年の災危のみに止まらず、傳へて子子孫孫の不幸さなるべし、「艶麗はいつはりなり美色きも呼吸の如し」、只温順なる妻は其夫を喜ばせ、彼の智惠は夫の躰に膏油注ぐ。謹愼にして言葉少なく眞實にして愛深き女は神の賜なり世の寶なり、こは汝の爲めに祈る所の良妻なり

家庭雜誌第十三號には大附錄を添ふべし

家庭雜誌定價表

	前金	地方郵稅共
一册	五錢	五錢五厘
六册	三拾錢	三拾三錢
十二册	五拾錢	五拾六錢

廣告料　二拾四字行數回數に付割引無　八錢

本社は前金にあらされば發送せず爲替は芝口郵便局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割增しの事

發行所

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎
東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

人見一太郎著

國民的大問題

頁數二百五十
定價二十錢
郵稅四錢

今や非內地雜居派は、雜居尚早の大辯論の下に大運動を試みんとす、知る可し第五議會の最大問題は則ち是れ國民的大問題たる條約問題たるを、國民にして、苟も國權の缺損を慨し、國光の回復を計らんとする者必す本著を座右に置かざる可らざる也本著の價値は、左の批評を以てトするに足る

●經濟雜誌の評に曰く　著者は民友社の年少卓見家人見一太郎君なり、序文に……「余固と時務を推拓するの識見なく、迷蒙を破却するの齒舌なし」……と云へるは遁辭のみ、否反言(アイロニー)のみ、君の識見を以て目下の急務たる條約改正問題を論ずる文辭通俗なりと雖も、讀んで憤慨の氣自から其中に籠れるを知るべし、況んや我國の外國條約の淵源する所を調べ、文書事實に就いて考證したる有益の書なるをや、但君の論を實地に行はんとは、政府否一般日本人民の手腕と度胸にあるのみ、

●自由新聞の評に曰く　條約改正は我が政界に於ける重大問題の第一なり國民の之を研究する宜しく其首より尾に透徹するを要す何となれば苟も透徹ならずんば偏見固執に陷りて悟らざるの恐あればなり此篇は曾て國民之友に連載したる條約改正論を敷衍し增補し追加したる者にして該問題の歷史及び改正の準備機會を論じ治外法權撤去關稅改正內地雜居土地所有權等を論じ終に臨で改正の方策を論ぜり此問題を研究するに於て好參考書と云ふべし而して卷末に付したる土耳古のカピチユラシヨンに就て所感を記すの一篇の如き著者の所謂血性を攄へたるもの讀去て感慨止む能はさらしむるものあり

●東京日々新聞の評に曰く　京橋區日吉町四番地民友社に於て發兌せり、全篇我が現行條約の利害得失を詳叙す、就中治外法權の撤去、關稅の改正、內地雜居、土地所有權等の事を論ずる明晰にして又た痛快、心を外政に用ふるものは一讀以て自己の意見と對照せば蓋し裨益する所尠なからざるべし

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

復刻版 家庭雑誌 第1回配本（第1～5巻）

1986年10月25日 発行

定価 90,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版㈱

東京都文京区本郷5-28-3

〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房

乱丁・落丁はお取り替えいたします。